坪內雄藏著

國語讀本字引

高等小學校用

一二

4
73

的場子禮編

高等小學校用

坪内雄藏著

國語讀本字引

大阪　吉岡書店藏版

特29
198

○おのづから　自然

坪内雄藏著　國語讀本高等小學校用卷三字引

的場子禮編

第一課　太陽（タイヨー）

本課は、太陽は如何なるものとひふことを說き、地球との關係はいかなりとのことを述べしなり

地球（チキュー）　一つの星にして、吾人の住居する世界なり　**與ふ**（アタ）る　**本源**（ホンゲン）おは　もと　**恩澤**（オンタク）めぐみ　**被る**（カウム）めぐみをうける　**絕間**（ゼツカン）されるあいだ　**燃え**（モエ）。**發散**（ハツサン）はなち、ちらす　**球體**（キユーたい）まるきたまのかたち　**距離**（キヨリ）はなれたるあいだ　**遠し**（トホ）太陽と、地球との距離は凡そ三千七百五十万里　**肉眼**（ニクガン）つねの目○めがねをもちねざる目　**直徑**（チヨクケイ）さしわたし　**火の球**（ヒのタマ）火のもえてあるたま　**傍へ**（ソバ）太陽のあたりへ　**燒き盡さる**（ヤキヅク）燒いてしまはれる　**幸に**（サイハヒ）よいことには　**離れ**（ハナ）間がある　**おのづか**

特29
108

○おのづから自然

國語讀本 高等小學校用 巻三字引

坪内雄藏著　的場子禮編

第一課　太陽

本課は、太陽は如何なるものといふことを說き、地球との關係はいかなりとのことを述べしなり

地球　一つの星にして、人の住居する世界なり　**與ふ**　おくる　**本源**　おほもと　**恩澤**　めぐみ　**被る**　めぐみをうける　**絶間**　きれるあいだ　**燃え**。**發散**　はなち、ちらず　**球體**　まるきたまのかたち　**距離**　はなれたるあいだ　**遠し**　太陽と、地球との距離は凡そ三千七百五十万里　**肉眼**　つねの目○めがねをもちねざる目　**直徑**　さしわたし　**火の球**　火のもえてあるたま　**傍へ**　太陽のあたりへ　**燒き盡さる**　燒いてしまはれる　**幸に**　よいことには　**離れ**　間があるおのづか

らしせんと　周圍または　回轉くるくるとまはる　星　星には、めぐる星と、めぐらぬ星とあり、めぐるは遊星といひ、めぐらぬは恒星又星辰といふ　過ぎず　ばかりである　水星　太陽と一ばんちかし、其直徑千二百里餘、太陽との距離凡そ千四百五十里　金星　直徑凡そ三千里餘、太陽との距離は凡そ二千七百十万里あまり　火星　直徑凡そ二千里餘、太陽との距離凡そ五千七百万里ばかり　木星　直徑凡そ三万六千里餘、太陽との距離凡そ一億九千万里餘　土星　直徑凡そ三万二千里ばかり、太陽との距離凡そ三億五千七百万里あまり　天王星　直徑凡そ一万三千五百餘里、太陽との距離凡そ七億二千万里ばかり　海王星　直徑凡そ一万五千里、太陽との距離凡そ十一億二千万里餘　同類　地球と同じたぐぬ　關係　かかはり　圖に示す　繪圖にかいて　季候　さむい、あつい　變化　うつりかはる　基く　それが、もとになる　熱帶　一ばんあつきところ◎地球の中央の赤道（セキドー）を中として、南と北とに二十三度二十八分づゝのところに二線あり、北を夏至線（ゲシセン）、南を冬至線（トージセン）といふこの二線の間を熱帶といふ　寒帶　地球の南北二極にかたよる、最も寒き一帶の地方をいふ、赤道より南北へ、おの〳〵六十六度三十二分より外の地を

○ぬらせ　居ラレヲ

○一しょ　一緒

いふなり　地理上　地理の學問の上　區別　わかち　かた　然り　そのとほり　めぐみ　芽（め）をふくむ　咲き。實を結ぶ　實がなる　餘澤　のこれる　めぐみ

第二課　都の花見の景況を知らする文

都とは、にぎやかな土地をいひ、景況とは、ありさまなり本課は東京にて花見をせしありさまを、親（オヤ）のところに知らせる手紙の文なり、女子の文體と知るべし

最中　さいちゅー　祖母樣　祖母は、わがおやの母をいふ　機嫌　こころもち　あらせられ　御くらしなされる　都田舍　にぎやかな市街とさみしき村さと　隔て　わかち　花時　花ざかりのとき　上野　東京の名所　向嶋　同上　賑ひ　はんくわにして、にぎやか　祭禮　神まつり　幾つも　たくさん　一しょ　ひとつにする　自轉車　じぶんのあしで、ふんでまはらすくるま　騎

○目まぐるし 目眩
○あふる 溢
○ゆきゝ 往來
○大がい 大概
○をかし 可笑

馬 馬にのってあるく **目まぐるし** 目がまふよーな **鐵道馬車** 鐵道の上をはしる馬車

あふるゝほど 一ぱいになりあまるほど **載せ** 馬車に人をのせる **ゆきゝ** 往きたり來たり

公園 だれでもゆきて、きままに、あそぶところ **平生** ふだんから **開設** ひらきまうける **博**

物館 さまぐゝの物をあつめて、ひろく人に覽せしむる所 **動物園** すべての、いきものをやしなふには **パノラ**

マ うつしゑ ●かげゑ **常例** いつものきまり **美術品** 書畫、細工(サイク)物、彫刻物(ホリモノ)塗物(ヌリモノ)など

工藝品 工作の技藝(ギゲイ)になりしもの **展覽會** ならべて諸人に見させる會 **界隈** そこらあたり

葭簀張 葭にてつくりし簀にて、四方を張りまはしたる **掛茶屋** 腰(コシ)をかけて、やすむところ **趣向**

おもひつき **樂隊** なりものをならしたる人數 **紅白** あかとしろと **運動帽** てがるい、かぶりもの **冠**

り かしらにかむる **進行** すゝみ、あるく **大がい** おほかた **をかし** わらふべき **落**

○とぎれ 途絶
○こてゝ 迚

語家連中 はなしする人のなかま **揃ひ。扮裝** 身のなり **藝人** げいをするひと **會**

社員 何それの會社につとむる人 **化粧品** 香水、おしろひ、紅など **廣告** ひろく、しらせる **取り**

わけ 中にもべつだんに **堤。花の間** 花の咲きし時のあいだ **車馬止** 車も馬も通行をとめる **と**

ぎれず たゆることとがない **屋形船** 屋根をこしらへたるふね **隅田川** 東京市の東部にあり、秩父(チヽブ)郡より出で、永代橋をすぎて海に入る、両國橋など此川に架す **上る** 川上へ舟をやる **ボートレース**

ボートといふ小き舟のこぎくらする **色わけ** 赤白などの色でわける **短艇** ボートのこと **一齊** ひとそろひに、そろふこと **艇を擧げ** 艇は舟の方向を定むる具 **波を蹴たて** 波をけりたてる **漕ぎ**

ふねをこぐ **競ふ** せりあふ **勇ましげ** がよい **とても** なかなか **寫し盡**

されず かいてしまはれぬ **寫眞。數葉** 四五まい **想像** おもひやる○おもひかんがへる **味**

○めづらし 珍
○おすき 好物
○かしこ 畏
○心だて 氣質
○やさし 優美

附海苔 東京の名物、味をつけたる海苔 **一鑵** 鑵づめを一つ○味附海苔は鑵づめなり **めづらし。**

おすき このむ **かしこ** 女の手紙の終に書く文字○かしこむ、敬ふ意

第三課 熊野

熊野は、遠江國池田の宿の某の女なり、本課は、熊野が平(タヒラ)の宗盛に仕へて、榮華の身なるにもかゝはらず、其母の病を聞き、暇を願ひて歸りしことを說き、其孝心ふかきと、歌の德とを書きしなり、委しくは本文にあり

平家 桓武天皇より出づ、源氏とともに武門の將たり○たひら **盛** 平清盛(キヨモリ)の第二子、重盛(シゲモリ)の弟 **召使** そばにつかふ女 **心だてやさしく** そのこゝろいきが、みやびやかなり **國もと** 遠江の國 **重病** おもきやまひ **言ひおこし** いふてよこす **看病** びょーにんのかいはー **暇賜はりたし** おひまを、くだされたい **折** 時と同じ **命。**

○氣をもむ 焦慮
○かしこまる 畏承
○つらさに 苦辛
○こもかくも 兎も角
○ちぎる 斷ル

今にも危し いまともしれぬはどに、あぶない **傳言** ことづてする **狂ふばかり** きちがひにもなるほどに **氣をもみ** こゝろづかひする **召し** よばれる **參り** まかりいでる **けふ** 今日 **準備** したくをする **供せよ** ついてこい **かしこまりぬ** しょーち **つらさに** くるしさに **打ち萎れ** 草のしほれたよーに、いきほいなくしてをる **其顏色** 熊野のかほいろ **如何に** どのよーにした **恐るゝ** こわごわに **重り** おもくなる **命危ければ** いのちが、今も知れぬほどにあぶなし **何卒** どうぞ **きゝも** よくく聞きもせず **はてず** **隨意** こころのまゝ **あらじ** あるまい **ともかく** その事は、いかにあるとも **據なく** いたしかたなく **途々** みちすがら **思ふ樣** おもふこと **もに** **咲く。散る。惜し。命の絲** ひとのいのちの、いとすぢの如きは **ちぎ**

○なさけなや 無情
○むせび 咽
○うづま 埋る
○しだれ櫻 垂枝櫻
○はては 終

るれば（されたならば）つなぎ難し（つなぐことができぬ）なさけなや（おも）
（ひやりなきことである）此の世（いきてをる世の中）人知らぬ涙（人はなんともしらぬなみだ）むせ
び（しゃくりあげてなく）さるほど（彼是するうち）清水寺（京都東山にあり）廣やか
（ひろく）としたる）境内（寺の地内）うづまるばかり（うまるとおもふほどに）咲き亂
れ（一ぱいにさく）しだれ櫻（えだのたれたる櫻）一重（花びらがひとえ）美し。盛り
の風情（はなざかりのありさま）譬へんに物なし（たとへたいにも、たとふべき物がない）腰
元（女中）舞ひ歌はせ（舞をまはせ、うたを歌はせて）はては（しまひには）いひ
つく（命令すること）かなしさ（母の病氣を見舞ふことのならぬかなしさ）氣勢（いきほひ）主人
宗盛のことをいふ）是非なく（いたしかたもなく）いかにせん（どのよーにしよー）都の

○あづま 東國
○ほのめかし 諷又ハ暗示
○おもひやり 同情相憐

春（京都の春の花も）惜しけれど（今さかりに咲く花も、またちるかと思へばおしけれど）なれしあ
づま（わが生れたる土地の、なれたる遠江國○あづまは東國、遠江國）花や散るらん（この花は、わが母にたとへ
しなり、病みたる母は死になさるであらう◎歌の意は、都に咲いたる櫻の花も、いつしか散るかとおもへば、惜しいことは惜しいが、又來年になれば咲くべきものである、しかるにわがなれたあづまの遠江國にござる母人は、おもき病にかゝられたり、この花ばかりは、一度散ればまた咲くことはないものである、今その花が散るであらうとおもへば、これをどのよーにしたらばよからん、二度と見ることは出來ぬのに、と、花を見たるにつけて、母にあはれぬをなげきたるなり）旦夕に
せまれる（あさか、ばんかにせまつてながくもないといふこと）ほのめかしつゝ（それとなく、おほよそからしらせる○つゝとは、さうしながらといふこと）あわれがり（ふびんがる）思ひやり
さつしあはれむ）薄き（こゝろのうすくすくない）不便と感じ（あはれなこととおもふ）てや
さうしたのであることか）即座（そのばで）暇を與へ（ひまをやる）取るものも取

○もと許

りあへず おほいそぎで○取るべきものも、取つてしまはぬの意 しゆつたつする あづまの母 遠江にある母 もとろ その場 花見のところ 旅立ち

第四課 迂濶なる醫學生

迂濶とは、うつかりすること○醫學生とは醫師（イシヤ）の學問する人○本課は、ある醫學生が、學理はかならずしもおぼえて居らぬとも、書物さへあればよしとて、書物ばかり寫して大なるしくじりをしたといふ話を書きたるなり

一少年 ひとりの年わかきもの 醫學 ひしやのがくもん 修めしゆぎよーをする 長崎 肥前國の有名なる土地 赴きゆく 或和蘭人 和蘭といふ西洋のあるひと 就き その人のそばで 學理 がくもんのぞーり 必しも ぞーでも 記臆 こゝろにとめる●おぼえる 要 ひつよー 寫し とゞめ 書きとめておく 調ぶ。可なり よろしい 講義 こーしやく いふに及ばす いはんでもしれたこと●もちろん ふるゝに任せ 目につくまゝに ひたすら ひとすぢに 務め やくめとする 寫本 うつしたしよもつ 數百卷 五六百さつ 珍書 めづらしきしよもつ 成就 できあがる いざ いでやといふ發語のことば 京 京都 開業 いしやの業をひらかん 師 ししよー（和蘭人） 別れを告げ ひとまづひする 夥し たくさん 行李 つづら●たびにもつ 收め とりいれる 日數經て 日數がたつて 玄海灘 赤間關（アカマガセキ）をはなれて筑前、肥前にそひたる海をいふ 空模樣 てんきのよーす 俄か。變り。木の葉 木の葉の散るよー 漂ひ ながれあるく 乘客 ふねにのりしひと 心地 こゝろもち 大浪逆 大きな浪がまきかへる 卷き おほふ 浪が舟をかぶせる 艫 ふねのうしろ 荷物。押し。 行方 ゆきがた 程經て 何ほどかたつて 馬關 長門國赤間關 一部 一さつ 苦學

○ひたすら只管 ○いざ率 ○おほふ覆

なんぎしてがくもんする

ざりき　あだとなり　たより　ちがはなかった　たの　みひだごとなる　智識ものを、しること　異なら　悔あるべし　くやむことがあるであらう

第五課　胃の腑の說諭

胃の腑はいぶくろにして、食物をこなすところ、說諭はときさとすなり、本課は胃の腑が手足目口などに、力を合せ心を同ふせねば、何事もならず、また難義すべきことを說き諭せしなり

鼻胃の腑　いぶくろ　對し　むかつて　不平をいだき　ふまんぞくにおもふことが　あつて　相談會　あひよりあひ　彼れめつ　あながら　じつとしてをつて　一　言　ひとことゴンジ　失敬　ぶれいなシツケイ　自分勝手　わがままものジブンカツテ　以後　これからめちゴイ　働く　せいをだす　なまけ者　おーちやくものモノ　懲らす　こりこりさせる　揃へ。　贊成

○彼れめ　彼奴

同意と同じ○それがよからうくといふこと　叫ぶ　大きな聲をした　膳　食物をのせたる臺　箸。　嗅ぐ　にはひをかぐ　視る。　齒。　舌。　めいめい　われ　なえ　だるくなる●ぐにゃぐにゃになる　凹み　ほれこむ　落ち　やせることこと　息は切れ　いきぐはしくなる　つまり　つゞまるところ　苦み　なんぎ　驚き　びつくりする　とんだこと　おもひもよらぬこと　後悔　あとでく　說得　いふてきかした　一體　すべて　諸君　みなさんが　僕　わたくし　誤り　まちがひ●かんがへちがひ　送られ　はこばれた　全體　からだのこらず　消化　こなれさせる　滋養分　やしなひとなるところ　諸方　あちらこちら　血管　ちのめぐるくだ　受け　もらふ　健かに　たつしやに　出來。　さうと　左樣であると　一圖　ひとすじに　そねみ　にくむ　職分　やくめ　忘った　なまけた　苦の原因　なんぎのもとゐ　心を改め

○なえ　萎

○つまり　畢竟

りよーけんをかへ **協力同心** 力をあはせ、こゝろを一つにする　**肝要** かんじんかなめ　**やさしく** おとなしく　**懇に** しんせつに　**成程** もつともと　**感服**、かんしんしてしたがふ　**忠實** まめ〳〵しく　**職務** つとむべきやくめ　**力め** せいをだす　**といふ** じゃといふことである

第六課　食物

本課は、食物の人身における、よしあしのことなどをすべて說きしなり

飲食 のみくひ　**目的** めあて　**滋養物** やしなひになるもの　**供給** あてがふ　**體力** からだのちから　**心力** こゝろのちから　**强壯** つよく、たつしやにする　**組織** くみたてる　**物質** しなもののかたち　**次第〳〵** だんだん　**消費** つかひなくす　**適宜** よきほどに　**補フ** たし、つくらふ　**然ラザレバ** さうでなければ　**活潑** げんきのよき　**能ハズ** できぬ　**主ト**

○カタヨリ　偏倚

シテ おもに　**脂肪** あぶらあるもの　**澱粉** よどみたるこ●をどみこ　**蛋白質** たまごのしろみのたち　**含メル** 中にいくらかもつてをる　**カタヨリ** 一方にのみよる◎脂肪質ばかりとか、又は蛋白質ばかりとか、かたゝ　**概ネ** たいがい　**富ム** たんとある　**乳汁** ちちのしる　**然リ** そのとほりである　**獸肉** けもののにく　**乏し** すくない　**植物性** 野菜(ヤサイ)などのせいしつ　**穀類** こめのたぐひ　**菜類** やさいのるい　**果實類** くだものたぐひ　**五穀** 稻(イネ)麥(ムギ)粟(アワ)黍(キビ)豆(マメ)　**適ス** かなつてある　**就中** そのなかでも●とりわけ　**多量** ぶんりよーのおほい●たくさんの　**三物質** 脂肪質、澱粉質、蛋白質、　**燐酸石灰** 燐酸は、燐素(リンソ)が酸化(サンクワ)せしもの、石灰はいしばいなり、一種の礦物質の名なり　**含有ス** ふくみ、もつてをる　**劣ラズ** まけぬ　**食鹽** しほ　**血液** ちのしる　**成分** ものと　**胃液ノ素** 胃の中にある液(しる)にして、消化をたすくるものを胃液といふ、素とは、そのもとなり　**弱ク**。

効ナシ（きゝめがない）　強ク心掛（こゝろざし）　時刻（とき）　回數（くわいすう）●そのたびのか　一定（いつてい）ひとつにさだめる　擇ブ（えらぶ）　變化配合（へんくわはいごう）變化はいろ〜かへること、配合は、とりあはせること◎同じ物にても、或はゐぶり、或は煮(に)るかどときを變化といふ　分（ぶん）ひ、今日大根ととりあわせたれば、明日は芋(いも)ととりあはせるを配合といふ

量（りやう）おほいと、すくないと　ホド〳〵　多くもなく、少くもなく、よいほどあひ　程ヨク（よいほど）　運（うん）

動（どう）からだをうごかす●はたらく●ばたゝくする　休息（きうそく）やすみいこふ　睡眠（すいみん）ねむる　熱キ。冷キ。

嚼ム。非ナリ（ひなり）よくない●してはならぬ　諺（ことわざ）むかしからのいひならはし　命ハ食ニアリ（めいはしにあり）人のいのちの、長いと、短いとは食ひものにある　宜シキヲ得ザル（よろしきをえざる）ほどのよろしきを得ぬ●ためにならぬ

百病ノ源（ひやくびやうのみなもと）いろ〳〵のやまいのもと　慎マザルベカラズ（つゝしまざるべからず）氣をつけねばならぬ

第七課　動物の自衛（どうぶつのじえい）

動物とは、人はもとより、鳥獣、魚虫など、すべて自ら動くものをいふ、自衛とは、自分で自分の身をまもり、よーじんするをいふ、本課は、動物が、自ら用心することの話を書きたり

牙（きば）とがりし歯(は)　角（つの）。鷲（わし）鳥の名、たけきとり　嘴（くちばし）。爪（つめ）。獅子（しし）獣の名、たけきけものにして、獣の王といふ、印度(インド)及びアフリカに産す。　虎（とら）たけき獣、印度其他に産す、猫に似て大なり　猛獣（もうじう）たけきけもの　鋭き（するどき）と　護り（まもり）よーじんする　敵を斃す（てきをたおす）むかつてくるものを、ころす　禽獣（きんじう）とり、けもの　武器（ぶき）いくさどーぐともいふべし　有せざる（ゆうせざる）もつてをらぬ　相當（そうとう）その身にかなふ　さゞえ海中に在る貝類　蛤（はまぐり）貝の名　行歩（こうほ）あるくこと　自在（じざい）かつて、きまゝ　貝殼（かひがら）貝のから　潜む（ひそむ）かくれる　猛き魚（たけきうを）すら　つよき魚でさへ　襲ふ（おそふ）せめかす　蝦（えび）介類　蟹（かに）介類　甲蟲（こうちう）よろひをきたるむし　鎧を被り（よろひをかぶり）鎧は、むかしの身にまとへて敵をふせぎし物　防ぐ

○さゞえ　榮螺

○ひきがへる 蟇
○まぎらはし 紛ハシ

よーじんする 例へば ためしをあげてみれば ひきかへる 虫の名 蟬 虫の名 捕へ ひけどる 周圍 まはり まぎらはし 彼れと是れと見ちがへる 北國 きたのさむき

ぐに 野兎 野に居るうさぎ 樹の枝 茶色。 とぞ といふてとである 烏賊 海中

に居る むし 墨汁 くろきしる 吐き はき出す 濁らせ。 匿す。 鼬 小なる獣 窮

す なんぎにせまる 惡臭 あしきにほひ 放ち だす 雁 かり、水鳥の名 鴨 水鳥の名 群

居 たくさんに、あつまりをる 生活 くらす 眠る間 ねてをるあいだ 軍隊 へいたい 哨

兵 ものみのにんず●ばんぺい 最高等動物 一ばん、くらいのたかい動物 腕力 うでのちから 甲

殼 むしの如き甲や、貝のごときから、 智力 ちえふんべつのちから 秀で ぬきでてをる 工夫 かんがひ

和親協力 なかをよくし、ちからをあはせ 當る むかふ 毒蛇 どくわるへび 驅り

立て おひたてらる 野の末 野原のすみ 辛うじて やつとのことで 生を保

つ いのちを、なからへる 所以 わけ 協和 ちからを協(あは)せ、仲よくする 最大利器 この上のない、大きな、よくきれるはもの

第八課 大塔宮吉野落

大塔宮とは、後醍醐天皇第二皇子護良(モリナガ)親王のことなり、吉野落とは、後醍醐天皇の元弘二年に、北條高時が鎌倉より兵を率ゐて攻め上りし時、宮は大和國吉野の城にあらせたまひしが、其の城の陷(おち)いるにしたがひ、宮は吉野より、天の川に御にげたまひしをいふ、本課は、其吉野落のことを、ふしゐもしろく書きたるなり◎本課は一句一句、本文をかゝげてこれを講釋したり

命の綱と賴みたる たとへば、生きるも、死ぬるも、これがわが命のかゝる、一トすぢの綱もおなじことぞとたよりにした 吉野の城も今は早や 大和の吉野の城も、今となつては、もはるや◎吉野の城が命の綱とおもふとの意

○あらし 暴風雨

○いで 率、（發語のことば）

あらしの前の花なれや　風雨の前に咲きたる花と同じよ　と
にいつ散らさるべきも知れぬか

ても散るべきものならば　いかにしても、どうで散るべきものであることならば　い

で潔く散らばやと　いざや、さっぱりときれいに散ったならば、その方が男らしいではないかと◎是は、どうで死なねば
ならぬことなら、賊軍の中へ切つて入り、はなゝしく
一トいくさをして、じがいしたがましであるとの意なり　宮は覺悟をき

めたまふ　大塔宮は、討死（ウチジニ）するりゝーけんを御きめなさるゝ　主從あわせて幾

十騎　主人と、けらいとを、合せて四五十人の騎馬武者ども　雲霞の如き敵中へ　雲やかすみのごと
くむらがる敵軍のをる中へと　命なげすて切り入れば　命をないものとして、切りまくって入りこめば

敵はこらへず追ひたてられ　さすがに、多くの敵軍も、宮の勢ひに、こらへきれず、追ひた
て、おひつめられ　谷間〳〵へ逃げ下る　四方の谷あひ〳〵へ、にげておりる　風に木

○すべ 蹴術

○かけつくる 駈付

の葉の散る如く　敵のにげるありさまが、たとへて見れば、風のために
、秋の木の葉がもまれて、散りみだるゝ如く

さもあれ敵には新手あり　一度は敵も、逃げたが、さうではあれども、敵軍にはまだ新らしい軍勢
（グンゼイ）がある　入りかわりまた攻め寄する　その新手の兵が、逃げた軍兵に入り
かはつて、またも攻めておし寄せる　長く防がんすべもなし　敵は大人數なり、味方（みかた）は小
人數なり、一度はみごとに追ひまくったれども、とて
もいつまでも、長く防ぎとめる、いたしかたもない　藏王堂の大庭に

今はこれまでであるとおぼしめして、藏王堂といふ寺の前のひろやかなる庭の上に　宮一同を集めさせ　大塔宮は
みなゝの家來（ケライ）をあつめなされ　最期の酒宴を張らせらる　最後は、ふ、張るは、さかもりすること、いとまごひのさかもりをあそばさる　かゝる折しもかけつくる
今さかもりをあそばさせらるゝ、そのときに、いきせきとかけて來る　村上彦四郎義光　宮の家來にて、南朝の忠臣なり

手傷きびしく負ひながら（いくさのために、手傷をたくさんにおふてをりながら◎鎧（ヨロヒ）に十六筋の矢がたちしと）宮の御前にひざまづき（大塔宮の御前にかしこまりまして）「はや事急なり恐れながら（義光のいふことには、もはや事がせまつてきました、このまゝには居られぬ、恐れ多いことなから）御直垂や御鎧（宮の御めしの錦の御直垂と、御鎧や物の具を）ぬがせられて賜はれよ（御ぬぎなされて、私に下されまするよーに）はやく〳〵」とすゝむれば（早うに早うにと御すゝめ申しましたれば◎「義光は、事急なりといひしは、吉野の城にて功を立てんことは叶はぬなり、まだ敵の人數や、外へまはらぬこそよけれ、この間に一方の敵をのみ打ちやぶりて落ちさせ玉へ、敵が外へ回つては、もはや叶はぬの意、又直垂や鎧を賜はれとは、義光が宮の代りとなつて、あとに殘り敵を欺かんの意」いかでさることと忠臣を、どうしてそのよーなことができるものぞ、かゝる忠義の臣をひとり殘して落ちんや」と（たゞ一人だけ殘しておいて、われ一人にげらるゝものであらうかとばを、御聽き入れなさるよーすも見えぬ）聽き入れたまふけしきなし（義光のこと）義光大に氣をいらち（義光は、大きにてゝろをあせって）「國の安危を一身に（義光の申すには　これは宮の御言葉ともおぼえぬことで、國のやすきと、あやふきとを、宮御一人の御身にて）荷ふ御身ぞむざ〳〵と（御ひきうけあらせたまふ大切な御身でありまするぞや、それをむざ〳〵と、益なくも）こゝにて御最期あるべしや（こゝで、御自害（ゴジガイ）あそばされまするか、それは御考のたらぬこと）是非落ちたまへ」といひつゝも何はともあれ、むりからにも、こゝは一ト先づ御にげあそばしまするよーに」といひながらにも御物の具の紐を解く（御めしたもふ、直垂や、御鎧の上帶のひもをときたてまつれり）宮げにもとやおぼしけん（大塔宮も、義光の言葉を、もっともであるとおぼしめされましたものか）直垂鎧ぬがせられ（錦の直垂

○氣たいらち　焦慮

○むざ〳〵　徒爾

○げにも　實に

や、御鎧をぬぎなされて「我れ若し生きて世にあらば大塔宮の仰せられまするには、自分が万が一にも運つよくして、生きながらへて、この世にをることができたならば汝があとを弔はん其方が、しんだあとの、とひとぶらひをするであらう死なばあの世で逢ふべし」と不幸にして、死んだならば、あのさきの世に出合ふべしとて涙ながらに落ちたまふ宮は、涙をながしながら、御にげなされた御影遠くなりし時義光は、宮を御見送り申して、今は宮の御影も遠く見えさせたまふとき宮のめし物身に着し宮の御めし物の、鎧や直垂を、わが身に着(ツ)けて櫓に現れ大音聲吉野の城の中の、ものみの櫓に、すが「大塔宮は我れなるぞなんぢ等が目ざすところの大將、大塔宮とは、わがことであるぞ最期のさまを見おけや」と今わが生害するところのありさまを、よく見ておけやといひて腹かききってぞ

○うせ亡

○すはや驚破(おどろき發すること)

○さわぎにまぎれ(壓ギニ紛レ)

○ついがなく無疎

うせにける腹を眞(ま)一文字にかききって、死んでしまひました「すはや宮には御自害ぞこれを見ました、賊軍どもは、すはや大塔宮さまには御自害あそばされたぞ○すはやは上を見よ我れ首とらん」と敵兵ばらわれてそ、御首をとりて、てがらにせんと、多くの敵の人數どもが圍み亂してつどひくるわれ一先きにと、とり圍んで居つたかこみを、ばら〳〵に亂して、あつまり來れりさわぎにまぎれつゝがなくそのさわがしきに、取りまぎれて、何のさはりもなく宮は吉野の山どえに大塔の宮は、吉野山の山を越えて天の川へぞ落ちたまふ大和國の天の川といふところへおにげなされし◎この吉野落のはなしは長けれど、本文によりてのみこれを說きたり

第九課　蜜蜂

蜜蜂とは、蜜をかもす蜂なり、本課には、蜜蜂の性質、効用など、すべて蜜蜂にかゝることをあつめのべたるなり

○カヒ甲斐々〳〵

群む（むれ）山野（やまや）栖ム（すみかとする）蜜（みつ）あまさきしる）蠟（ろう）あぶらの如きもの）飼（やしなふ）養（かひや）一群（ひとむれ）数フ（かんじよーする）雌蜂（めばち）をなど）雄蜂（をばち）をとこばち）工蜂（さいくするはち）女王（をんなのたいしょー）頭（たいしょー）巣。（すー）間〻（をりく）数百頭（五六百びき）集ム（よせる）務（やくめ）夥シ（たくさんある。）羽根強ク。カヒ〻（まめく）求メ（さがす）吸ヒ。運ブ（もつてゆく）一疋。量（かさ）僅カ（すこし）怠ラズ（なまけぬ）結果（できばえ）頗ル（よはど）食料（たべもの）貯ヘ（ためる）體内（からだのうち）分泌（しるをだす）物質（しなもの）蜂房（はちのすむへや）数多（たんと）筒。間毎（一トまづ）隔障（へだてしきり）支（もちあふ）底。三葉（三まい）菱形片（ひしなりのきれ）綴チ（つゝり）構造

こしらへかた）巧妙（たくみにたへなる）人工（ひとのさいく）優ル（すぐれてある）漉シ。精製（よきこしらへ）粘リケ（ねばくしたこゝろもち）甘シ。醫藥（いしやのくすり）膏藥ノ料（ねりぐすりのしなもの）蠟燭（火をともすもの）

第十課　一家の經濟

一家は、一けんの家なり、經濟は、くらしかたなり、

本課は、家のくらしかたの、しかたを書きたるなり

千丈（せんじよう）の堤も蟻の穴（あな）より崩（くづ）る　千丈もある高さの堤も、小さき蟻のかよふ穴から崩れる◎大きなものも、小さよりやぶれるの意　諺（ことわざ）むかしからのいひならはし　財産家（ざいさんかのいへ）　奢侈（おごりはでにする）　恥（はぢ）り（はまりこむ）　誤（あやま）る（しそこなふ）　貧窮（ひんきゅーなんぎ）　陥（かちい）る（はまりこむ）　況（いはんや）（それを、ましてや）　尋常（じんじようなみのなみな）　些少（すこし）　出費（にゅーよー）　積モリ

かさなる **驚く**（びつくりする） **多額**（たくさんなるたか） **慾**（はしきこころ） **募り易く**（ぞーちょーしやすい） **負け**。 **習慣**（しゅーくわん）ならはし●くせ **釀さば**（つくったならば） **身分不相應**（わがからだに、ふさはしからぬ） **奢り**（はでにする） **果ては**（しまひには） **家産**（いへの、しんだい） **傾く**（かたよる●まがる） **相當**（みぶんにかなふ） **家計**（いへのくらし） **整理**（と〜のへる） **主任者**（ひきうけるひと） **蓋し**（おしはかるに） **夫**。 **職掌**（やくめ） **大抵**（おはかた） **外出**（そとにでる） **主として**（おもに） **任**（やくめ●ひきうけ） **支出**（はらひだし） **豫め**（かねてより） **收入**（とりいれるもの） **應じ**（つろくして） **額**（たか） **帳簿**（ちょーめん） **備へ**（そろへる） **薪炭**（たきゞすみ） **雜費**（さま〜のにゅーよー） **記入**（かきいれる） **月末**（つきのすゑ） **當月**（そのつき） **計算**（かんじょーする） **決算**（かんじょーのしあげ） **總高**（すべてのたか） **最初**（一ばんはじめ） **豫算**（みつもり） **超過**（こえる） **否か**（さうでないか） **調査**（しらべる） **火災**（くわさい） **出來事**（おもはぬにできること） **不時**（ときならぬ） **要す**（つかはねばならぬ） **餘財**（あまつたかね） **貯蓄**（たくはへる）

○をさな幼稚

第十一課　孟子の母

孟子は、支那の鄒（スウ）の國の人にて、賢人といはれし大學者なり、本課は、孟子の母が、その子をおしへて、大學者とならせたることをかきしなり

墓塲（はかあるばしょ） **見なれ聞なれ**（つねに見たり、常に聞きたり） **友達**。 **葬禮**（そーしき●とぶらひのしき） **歎息**（ためいきついて、なげく） **朱に交はれば赤し**（あかきものと、まじると、あかくなる） **とか**（むかしから、いふことか） **をさなき**（としのちさき） **はた次第**

○れぎる 折直
○まぢか 間近
○おひたち 生長
○おどく 恐懼
○けしき 氣色
○いたく 傍
○あだ 無益
○いたづら 徒事

そばにある ものゝまへ 住居を移し いへをかへる ねぎる こぎる◎ねだんを やすくせよといふ 商ひ。不爲 ためにならぬ 新借屋 あたらしきかりいへ まぢか あいだが ちかい 人の道 人のなすべきしよさ 行儀 おこなひ 定めつゝ きめながら 送る春秋 おくりくらすとしつき 幾めぐり 何年もたつこと おひたち 年が大きくなる 他郷 よそのくに 遊學 がくもんにゆく 戀し したはしさ 折しも その時ちよーど 機を織り。いかほど どれほど 詰られ とひつめらる おどく ふるひおそれる けしきをかへ かほいろをかへ かたへ そばにある 及物 きれもの 斷ちこと これは かたち なりふり あだとなる むだになる 中途 なかほど 撓みなば さおちがするならば 多年 何年も何年も いたづら むだ

○ほまれ 名譽
○あくぎ 喘

おろか者 ばかもの 叱り。恥ぢ はづかしがる 賢人 かしこきひと ほまれ よきひょーばん 世々 いつのよにまでも

第十二課

瀑布

瀑布は、たきなり、本課には、瀑布のはなしを書いたり

早瀨 水のきゅーにながるゝこと 楓 木の名 蔭 木のかげ 山路 やまみち 登り のぼる 愈 高く だんとたかくなる 益 ますます 嶮し おいく さがしい 行手 ゆくさき 遠雷 とほくになる かみなり 響 おと あへぎ いきもきれくに すさまじき ものすひき 山岳 を震ひ やまや、だけをうごかす 絶壁 きったつたきし たとへん たとへよーとするに 碎 かれ。穿たる ほられる 疑ふ ふしんにおもふ 瀧壺 たきの水の、たゝえる所 相擊

ち（うちあふ）水煙（みづけぶり）　八方（そこらあたりぢゅー）　飛散（とびちる）　霧。濛々（おぼろげにくらくなる）　映ず（うつる）　虹（水氣の日光にうつりて、うつくしき七色の、まるくみゆるもの）　現ず（あらはす）

いさまし（いきほひがよい）　一例（ひとつのためし）　斷崖（きったつたきし）　直下（まっすぐにくだる）　急坂（けはしきさか）　水激せず（水がさからはぬ）　走り（かけり）　譬へ

ば（ものにたとへて見れば）　白糸（しろきいと）　投げ。練絹（ねりあげたるしろきいと）　布き

ならべる　水晶（しろくうつくしきたま）　簾（みす）　吊り（上から下につるす）　紀伊（國の名）　那

智（紀伊國の那智山）　下野（國の名）　日光（下野の地名、東照宮の在るところ）　華嚴（日光山にあるたき）

北米合衆國（北アメリカの合衆國といふ地）　中央（まんなか）　幅（瀑布の幅）　壯絶（この上なくすばらしなる）　様（よーす）　想ふべし（すいりよーすることができる）

第十三課　富士登山（上）

富士山は、駿河、甲斐にまたがる、わが國の名山なり、本課と、次の課とには、富士山に登る路すがら、および、そのながめなどを書きたるなり

可とす（よいときとする）　山頂（やまの、いただき）　消ゆれば（雪か消えるからである）　駿河（東海道の國名）　甲斐（同上）　須走（駿河の地名）　通例（ひとつ、ほり）　東京新橋（東京市内の新橋といふところ、東海道鐵道の起るところなり）　停車場（すてーしよん）　西行（にしにむかつてゆく）　御殿場の驛（御殿場といふすてーしよん）　許（ばかり）　茫々（ひろびろ）　裾野（富士山のすそにあたるところの野）　海面（うみのうへ）　盛夏（なつのさかり）　氣候すら（あつきときさへ）　強力（みちあんないする、つよきひと）　雇ひ。旅客（たびびと）　荷物（もちもの）　食糧（くひもの）　脊負ひ（せなかにおふ）　道案内（みちのてびき）　茶店。嶮阻（けはしい）　馬通は

ず（うまも、とほらぬ）金剛杖（山伏（やまぶし）なぞのつくつる）購ひ（かふ）短小（みぢかく ちさく）

遙か（ぼー）眺む。草色（くさのいろ）大空（てんのこと）接す（つゞく）處

々（ところ）散點（ぽつ〳〵と ちらばる）四壁（四方のかべ）室（へや● いへ）頂上（やまのい

たゞき）石室（いしにてつくりしむろ）稱す（名をつける）經て（こえて、）嶮し（さがしい）空

氣（そらのき）稀薄（うすく）呼吸切迫（いきがつまる）流汗（ながれるあせ）山麓

（やまのふもと）顧れば（ふりかへつてみる）暮色（くれかたのけしき）群山（むらがるやま〳〵）埋

め（うめる）將に沈まん（日がこれから入らうとする）半腹（やまのなかはら）浮ぶ（うい

てをるよーな）一宿（ひとばんとまる）蓆。烈し（きびしい）焚火（火をたく）暖を取

る（やう〳〵ぬくまる）燃えず（火がもえぬ）煑えず（にえぬ）

第十四課　富士登山（下）

翌朝（あくる日のあさ）室外（いへのそと）四面（四方）暗黑（まつくろ）晴朗（はれほがらかなり）微かに（ほんのりと）紫色（むらさきいろ）柵引く（ながくひきわたる）淡紅（うすべにいろ）深紅（ふかきべに）金光（きんいろのひかり）破り（ひらく）迸り（とびでる）射る（日がさす）黃玉色（きいろなまのやーな）熔解（とける）銅の塊（あかがねのかたまり）躍り（とんでる）見了り（みてしまふ）岩角（いはのかど）尖がり。劍（つるぎ）幾たび（なんべんも）鞋を代ふ（わらじをはきかへる）透る（しみこむ）絕頂（一ばんのいただき）達す（ゆきとどく）大洞（おほきなほらあな）噴火口（むかし富士山から、火を噴（は）き出したくち）跡。周邊（まはり）万古の雪（おほむかしからのゆき）湛ふ（一ぱいみたす）八

○さながら 宛然

峯（みね）やつの洞穴（ほらあな）。側（はた）そば泉（いづみ）、みづ望（のぞ）むながめる一帯（いたい）すぢ陸海（りくかい）くがちやうみや山嶽（さんがく）やまやだけ土塊（どくわい）つちのかたまり盆地（ぼんち）はちのいけ銀（ぎん）の絲（いと）しろがねにてつくりしいと蒼海（そうかい）あをくたるうみ白沙（はくさ）しろきすな後方（こうほう）うしろ東山（とうざん）東山道 北陸（ほくりく）北陸道 加賀（かが）。越中（えつちう）北陸道の國名 信濃（しなの）東山道の國名 呼（よ）べば聲をあげてよんだなら殆（ほとん）ど ちよーど 應（こた）へんとす へんじをしよーとする毫（ごう）も すこしも覺（おぼ）えず氣がつかぬ麓（ふもと）山のした踏（ふ）む。自然（しぜん）おのづから載（の）せ。飄々（ひらひらと）衣髪（いはつ）を翻（ひるがへ）しきものや、かみを、さながら あだかも ●ちよー 天空（てんくう）そら墜（お）つ。端然（たんぜん）たゝしき山容（さんよう）やまのすがた聳（そび）えたかく、たつてをる山腹（やまの、なかはど）送（おく）るもの〻如（ごと）し見おくるよーにおもはれる

○いつぱる 傷

第十五課

短篇一束

短篇（たんぺん）とは、みじかき文（ぶん）なり、一束（いつそく）とは、ひとつかねにしたるなり、本課は、短き文を、あれこれとあつめ書きしなり

矛（ほこ）と楯（たて） 矛は、てぼこにて、槍（やり）の如きもの、楯は、矢などの飛ひ來るをふせぐもの、ひかしの武器なり

鋭（するど）き よくとがる 誇（ほこ）り じまんする 突（つ）かば ついたならば 鐵石（てつせき）てつもいしも 貫（つらぬ）く つきとほす 堅牢（けんろう）かたい 箭（や）矢と同じ 防（ふせ）ぐ ふさきとめる 詰（なじ）り とひつめる さらば 然ばそなば 汝（なんぢ）そなた もて もつて いかに どのよーにある 口（くち）ふさがる へんじができなかつた

鹿（しか）わな わなは、獸をとらへるしかけ

「ふせて かくして 捕（とら）り とらへる 名譽（めいよ）はまれ 射（い）たり 弓にて射ころす い

○かひ 甲斐

○おし 唖 ○ねざり 蹠

○あわてふためき 周章

つはる だます 雁股 またのひらい た、矢の根 番へ 弓に矢をつける 綱 わなについたる綱

射切り 弓で射てきる 忽ち すぐに 足ずり わしで地をふみすり、くやしがること かひ

なし なにのせんもなし

世は相もち

相もちは、相持なり、たがひにたすけあふことなり

目くら 目のみえぬもの おし もの、いはれぬもの あざり 足のた、ぬもの 興來

れば おもしろくなつてくれば 歌ひ。 彈じ 三味(さみ)などひくこと 起つ。舞ふ。樂

しげ おもしろさうな 或夜 ある日のばんに 隣家 となりのいへ あわてふた

めき うろたへさわぐ 遁れん にげよ 能はず できぬ 負へ せなにおふ 導

き みちあんないする 逃げよ にげされ とれに從ひ この人のいふとほりにして 遂

に とく 難を免る さいなんをぬがれる 得たりき できたと、いふことである

第十六課 分業

分業は、しごとをわけてすることとなり、本課は、一つのしごとも、わけてすれば、早く出來て、力もすくなくてすむといふことを說き、分業と協同とが大切なことを書けり

商店 あきんどのみせ 繪。 念入リ ねんのいつたりのちから 自力 じぶんひとり 晝夜

ヲ兼ネ 晝(ひる)も夜(よる)も、かゝつてする 製造高 こしらへたたか 出デシ それより上はでき

ぬ 問屋 おろしうりのあきんど 卸サンニ 問屋にうりわたすに 原料 しなもののもと 費

用 にゆーよー 手間賃 ひまをいれたちん 利潤アルベシヤ まうけ、りえきがあるでか

らう 否ヤ どうであらう 恐ラク きづかふことには 損。 得 まうけ 相償ハ

ザルベシ 損と得とが、うめあはせられぬことであらう

職人 しごとし

事ニ從フ しごとをする

削リ。刷リ はんをする

スラモ それでさへも

分擔 てわけしてする●しごとをわける

仕上ゲ こしらへあげる

速サ。

到底 とても

比スベクモアラズ

くらべものにもならぬ

隨分 なかなか

廉價 やすいねだん

賣捌カル うりつけることができる

所以 わけ

勞力 ほねをり

省ク すくなくする

專ラ ひとすぢに

自ラ しぜんと

技 わざ

熟達 よくゆきとゞく

要スル つまるところ

協同 力をあはせ、心を同くする

文明生活 このひらけたる世の中のくらしかた

必須法 なくてはならぬしかた

両輪 くるまの、りーぼーのわ

偏廢スベカラザル どちらをのこし、どちらをすてるといふことのならぬもの

第十七課 望遠鏡の發明

望遠鏡は、とほめがねにして、遠きところを、近くに見得べきめがねなり、發明は、かんがへだすなり、本課は、望遠鏡を發明したる人のはなしを書きしなり

和蘭 よーろっぱの一國の名

貧し びんぼー

眼鏡師 めがねを、こしらへるひと

幼きむすめ としのちさきをんなのこ

如何にしけん どのよーにしたのか

聲をあげ 大きな聲をして

あれ 彼れと おなじ

塔 寺などにたてた る、高き建物

ことよ ことであるよの意

叫び 大きな聲をしてよんだ

怪み おかしなことゝ思ふて

少女 むすめ

○むすめ 小女

なた あちら

望み ながめる

檢べ ぎんみする

半面 かたひら

平か ひらたい

○かなた 彼方

凹み まんなかがへこみたり

凸か まんなかがたかい

不思議 がてんのゆかぬこと

件の玉 少女の手にせし玉を

爲しゝ したる

試み ためす

凸凹 なかだかなかびく

隔て 中をあけ

て

由を悟りぬ わけをかんがへた　凝らし さまざまくふうする　厚紙 あつきかみ

數箇 四つ五つ　箝め込み 玉を筒の中にはめる　やがて 取りもなほさず　起源 はじめ

天文學 天文をみるがくもん　進歩 すゝみゆく　賜 おかげ　功 てがら

第十八課　星ノ話

本課には、すべての星にかかる話を書き示したるなり

仰イデ 上をむいて　空ヲ望メバ 大ぞらをながめたらば　無數 かずかぎりなくたくさんな

輝ケル きらきらする　寶玉 たまま　散ラス まきちらす　天文學者 天文のことをしらべる學者

研究 しらべる○おしきはめる　恒星 みづから、光をはなち、つねにうごかぬほし　遊星 恒星の光をうけ、恒星のまはりをめぐるほし

流星 ながれぼし○小さき星が、地球の引力に引かれ落るほし　彗星 はゝきぼし○箒の如き尾を引くほし　光ヲ放チ ひかりをだす　比シ くらべて　距離 へだたり　反射 てりかへす

旋轉 めぐりまはる　旋ル まはる　附屬 つきしたがふ　衛星 まもるほし　閃々 きらくするさま　靜カ おだやか　往々 ときとしては　一方 ひとところ　忽然 たちまち　現ル みえる　見ル間 みてをるうち　他方 ほかのほー　影ヲ失フ かげを見うしなふ

引力 ひくちから　スレアヒ 星と空氣とがすれあふ　燃エ。 折々 ときゝ　拾ヒ。 檢ス しらべてみる　質 なりたち　概シテ 大がいは　にっける 金屬の名　トゾ と、いふことである　箒 庭などをはくもの　銀河 あまのかは　大空 おほぞら　群集 むらがりあつまる　各種 いろ〳〵　遠近 とほいちかひと　一樣 ひとと　微小 かすかにちさく

肉眼 ひとの目○眼鏡などをかけぬ時　尚ホ まだ　認メ難キ これであると、見とめのつけにくい

て

由を悟りぬ わけをかんがへた　凝らし さまざまくふうする　厚紙 あつきかみ

數箇 四つ五つ　箝め込み 玉を筒の中にはめる　やがて 取りもなほさず　起源 はじめ

天文學 天文をみるがくもん　進歩 すゝみゆく　賜 おかげ　功 てがら

第十八課　星ノ話

本課には、すべての星にかかる話を書き示したるなり

仰イデ 上をむいて　空ヲ望メバ 大ぞらをながめたらば　無數 かずかぎりなくたくさんな

輝ケル きらきらする　寶玉 たまもの　散ラス まきちらす　天文學者 天文のことをしらべる學者

研究 しらべる○おしきはめる　恒星 みづから、光をはなち、つねにうごかぬほしの光をうけ、恒星のまはりをめぐるほし　遊星 恒星

流星 ながれぼし○小さ星が、地球の引力に引かれ落るほし　彗星 はゝきぼし○箒の如き

尾を引くほし　光ヲ放チ ひかりをだす　比シ くらべて　距離 へだたり　反射 てりかへす

旋轉 めぐりまはる　旋ル まはる　附屬 つきしたがふ　衛星 まもるほし　閃々 きらく

するさま　靜カ おだやか　往々 ときとしては　一方 ひとところ　忽然 たちまち　現ル 見える

見ル間 みてをるうち　他方 ほかのほー　影ヲ失フ かげを見うしなふ

引力 ひくちから　スレアヒ 星と空氣とがすれあふ　燃エ。 折々 ときく　拾ヒ。 檢ス しらべてみる　質 なりたち　概シテ 大がいは　にっける 金屬の名　トゾ と、いふことである　箒 庭などをはくもの　銀河 あまのかは　大空 おほぞら　群集 むらがりあつまる

各種 いろ〳〵　遠近 とほいとちかいと　一樣 ひとほり　微小 かすかにちさく

肉眼 ひとの目○眼鏡などをかけぬ時　尚ホ また　認メ難キ これであると、見とめのつけにくい

無量はかられぬほど、たくさんにある　想フベシおしはかり、かんがへられる

第十九課　少年駱駝御者

少年は、年わかきもの、駱駝は印度などに産する大なる獸、御者は、つかふもの、本課は、年わかき駱駝をつかふものゝ、子供ながらに、よく物事をかんがへて、大人（おとな）も及ばぬはたらきをしたことを書きたるなり

亞剌比亞　アジヤ洲の西南にある國にして、アフリカ洲と相對したる國なり　妻子つまとこと　隊商連たいをつくつてゆく、しゝーばいのなかま　大沙漠おほさなすなはら　通って。スエズ亞剌比亞と、アフリカとの境界にして、もとは土地がつゞきをを、千八百六十九年即ち明治三年に、これを堀り開きて、紅海（コーカイ）と地中海と、通せしむる運河を開きたり　往復ゆきかへりする　生業なりはひ○しごと　許ところよせ來させ　慣れぬ旅よくなれぬたびみち　赴くゆく　心懸りしんぱい　修業けいこ　旅立ちしゅつたつ　準備よーいしたく　珍しさ。嬉し。年頃なんねんも　飼ひならしたる家にかひてならしたる　おとなしいやさしい　飲用水のみみづ　鰻とくり　仲間つれのなか　勇ましくげんきよく　途々。面白さうおもしろげに　話相手はなしするひと　遇ひであひ　のみそれば　熱帶前に出つかり　燒くやきつける　一面いつたいに　きらくすなはらに、日がつってひかること　晝頃正午のころ　木蔭と泉木のかげと、水の出るところ　そこで　暫時しばらく　湧きの水がわきでる　清水きれいなみづ　渴をいやしのんどの、かはきをとめる　つめかへ諸換　めかへ新らしい水といれかへる　暮れ日がくれる　天幕てんと○雨露のかゝらぬよーに、木綿の厚きものにて屋根をする　一夜を明しひとばんをあかす　翌日あくるひ　するとさうすると　正

○そこ其處

○まっく 黒暗　○さまよふ 彷徨　○ようすが 便

午頃（まひるごろ）砂煙（すなけむり）すながたつて、けむりのよーな 空を掩ひ（そら一めんをかくす）ま

つくら（どこも見えぬよーになる）一行（つれの人々）已むを得ず（しかたがなく）進行

さきへすゝむ 暫く（すこし）しづまった（おさまった）困った（なんきな）足跡

あるいた、あしのあとかた たより（たのみ）蹄の痕（駱駝の足のつめのあと）方角（どちが、どちやら）

さまよう（うろうろする）ようすが（てだて）互に（どちらからも）途方に暮

れ（せんかたつきてまどふ）沈んだ（日が入ってしまった）疲れ（くたびれ）睡るともな

く（ねるといふこともなく）うとく（うつらうつら）覺ます（目をさます）話聲（はなしこえ）

るこゑ あす（明日）殺し（ころし）胃の中（いぶくろのなか）誰れ（だれ）彼れ（あれ）

胸を貫かれた（むねをつきとほされたよー）驚き（びっくりする）不便や（かわいさうに）

○かうして（斯クシテ）　○もう 最早　○ほの明く（黎明）　○どうぞ 何卒　○けなげ 健氣

かうして（こんなにして）もう（もはや）寸時（すこしのまも）猶豫（ためらひのばす）

熟睡（よくねぶる）そっと（こっそりと）曳き出し（ひっぱりだす）急いで

蹄を早めて（駱駝のあしをいそがせる）逃げ。幸にも（よいことには）始終

いつも現れる（みえる）日沒後（日がいつてからのち）心得て（しつて）目じ

るし（めあて）一念（ひとすぢのこゝろ）鞭を加へ（駱駝にむちをあてゝいそがせる）ほの

く（うすあかるく）足跡（あるいたあしあと）力を得て（ちからがでゝ）夕方（ゆふかた）

れかたぼんやり（はっきりせぬこと）火影（火のかげ）一群（ひとむれ）野宿（そと）

にとまる 早速（すぐに）ありし事（いままであつた事）どうぞ（なにとぞ）同伴（おとも）

もさせて けなげ（げんきよき）感心（あきれる）承諾（しーちする）ぢゃら〜

鈴の音 鈴の音 駱駝につけた、鈴の音 到着 來りと 思ひがけなく おもひも
より 待ちわびて まちかねて 郷里 ふるさと○わが家のあるところ 連中 なかま 親
子の悦び ハッサンと、アリとの親と子がよろこび どんなで どのよーなので 樂しき
旅行 おもしろいたび 終へ しまって 恙なく なんのさはりもなく 始終 はじめから、おは
りまでの 母親 アリのは、

第二十課 埃及のピラミッド

本課は、埃及國にて、世に名高きピラミッドなるものあり、そのことがらを、くはしくのべたるものなり

東北端 ひがしきたのはし 以前 それよりまへ 既に もはや 開明國 よくひらけたるくに
聞こえ ひよーばんがある 歴代 だいだい 王廟 てんしのたまや 悉く のこらず

花崗石 みかげいし 煉瓦 つちをねり、やきてつくりしかはら 成り できる 金字形 金の
字をかいたよーなるかたち 或は なかには 七十餘基 七十だいあまり ナイル河 埃及第一
の大河 巍然 たかく、たつたるかたち 空に聳ゆ そらにたかくたてり 底徑 そこのさしわたし
面積 ひろさ 蔽ふ かくす ほど 一個 ひとつ 重量 おもさ 及ぶ とどく
おもふに おしはかつてかんがへるに 築造 きづくつくる 日子 ひかず 費した
りしならん つぶしたものであらう 規模 つくりかた 雄大 いかめしく おほきな 長
城 支那の万里の長城とて、名高きながきしろのこと 共に ともに 土工 ふしん 偉觀 おほきなるみもの
内部 うちかは 設け こしらへる 數多 たくさん 王家一門 埃及の天子の御一族
石柩 いしにてつくりしひつぎ 安置 やすんじおく ミイラ 人が死したれば、そのしがいに藥をぬりなどして、

布にてつゝみ、地の中にうづめ年久くして、かはさかれて、くさらぬもの

包被（ホーヒ）　薬のつけたる布にて、死がいをつゝむもの

包み（ツツミ）。

死屍（シガイ）●　**藏す**（かくしおさめる）　**腐敗**（くさる）　**發掘**（ほりだす）　**なほ**（やはり）　**面貌**（かばかたち）　**生けるが如し**（いきてをるよーな）　**方尖塔**（角がたに）

女面獅身像（女のかほで、獅子（シヽ）のからだしたるかたち）　**建設物**（たてたる）

殘在（のこつてをる）　**頗る**（よほど）

第二十一課　物價の事

物價は、物のねだんなり、本課は、品物のねだんに、高いや、やすいのあるは、何故なりやとのことを書きたるなり

假に（かりて）　こゝに一つの物を、かりて來て言はんに

位の差（ばあひのちかひ）　**例し**（ためし）　**卽ち價**（とりもなほさず、ねだん）　**絹布**（きぬおり）　**木綿**（もめん）　**貴し**（ねだんがたかい）　**隨うて**（それにつれて）

異なる（ちがふ）　**主として**（おもに）　**需要**（もとめつかふ）　**供給**（そなへあてがふ）

關係（かゝはり）　**製造高**（こしらへだか）　**消費**（つかひつひやす）　**餘りあり**（たんとよぶん）

不足（たらぬ）　**低し**（ねだんか、やすい）　**必しも**（きつと○きまりきって）　**暑に苦**（がある）

む（あつさに、なんぎする）　**誰れか**（たれ一人として）　**涼風を欲せざらん**（すゞしい風の吹くを、おもはぬものがあらう）　**然るに**（それであるに）　**天然**（おのづから）　**あればなり**（あるから、それで價がないのである）　**定め**（さだめ）　**賣買**（うりかひ）　**交換**（ひきかへる）　**清水**（しみづ）

但し（さうは、いふものゝ）　**通例**（ひとと）　**處から**（そのばしよから）　**穿ち難き**（ほりにくい）　**飲用水**（のみみづ）　**得易からず**（手に入れることがたやすくはない）　**他處**（よそ）

一荷（ひとになひ）　**田舍**（ひらさと）　**捕へる**（とる）　**都**（はんくわなところ）　**若干**（なにはぞか）

第二十二課　貨幣及び爲替

貨幣とは、かね卽ち通用の金錢のことをいひ、爲替とは、遠きところにて、一方の銀行や郵便局に現金をはらひ、その書付を一方へ送つて、その土地の銀行か、郵便局で現金を受取らせることをいふ、本課は、貨幣と爲替とのことをかきたるなり

甲の人（かりに、甲と名をつけし人）　乙の人（同上）　不足（たらぬ）　相補ふ場（あひぞなふ）

合（たがひに、たしあひするとき）　交易（かへる）　貨幣（かね）　なかりき（ありませなんだ）

かくては（このよーなことでは）　不便（べんりにない）　人智の進む（人の智慧がすゝんで）

だんゝかしこくなる　つれて（したがつて）　遂に（とう）　えらび（えりだす）　もて（もつて）

あらゆる（世の中に、あるといふ名のつくもの）　通用（つかはれる）　起原（はじめ●もと）　價格（ねだんのきまり）

貨物（しろもの）　段等（だんゝ●しだい）　要し（それがなければならぬ）　金貨（きんにてつくりしかね）

○かなた　彼方

銀貨（ぎんにてつくりしかね）　銅貨（あかゞねにてつくりしかね）　別（わか）ち　同種（おなじしゅるい）

代用（かはりにつかふもの）　紙幣（かみにてつくりしかね○さつ）　遠方（とほきところ）　商人（あきんど）

取引（あきなひ）　郵便（てがみ）　現金（そのまゝのかね○紙幣や金、銀、銅貨やをいふ）　懷中（ふところにいれる）

旅行（たびゆきする）　紛失（とりうしなふ○なくならす）　盜難（ぬすまれる）　恐れ（きづかひ）　除く（よける）

金錢（せにかね）　折（ち）と　便宜（つごーよき）　銀行（ぎんこー）　かねのとりあつかひする所　郵便局（ゆーびんをとりあつかふところ）

爲替劵（かはせてがた）　證書（しょーこ）　つけ　封入（ふうじていれる）　先方（むかふのところ）　かなた（あちら）　取扱所（とりあつかふところ）

至急（ごくいそぐ）　需要（つかひみち）　起こる（できる）　普通（なみ）　ひとと（ほり）　間に合ひ難し（そのまにあひにくい）

さる場合（さういふときには）　電

信爲替（シンガヘ）　でんしんで、かはせをとりくむ

とは（これは）　遣る（つかはす）　最も速（モツトスミヤ）か

一ぱん　はやい

坪内雄藏著　國語讀本　高等小學校用　卷三字引　終

坪内雄藏著　國語讀本　高等科生徒用　卷四字引

○むかし　昔
○いづこ　何處
○たゝかひ　闘
○たとひ　例令

第一課　武器

武器とは、いくさの道具をいふ、本課は、武器の必要なるわけ、および、むかしと今と、武器の異なることを書けり

大むかし（むかしのそのまたむかし）　いづこの（どこの）　野蠻國（やばんこくの）（みちをしらぬひらけぬ國）

大差（おほきなちがひ）　他の動物（人のほかの、動物にて、鳥、けもの、うをなどをいふ）　たたかひ

激しかりしかば（けんくわ　いきほひが、つよくありましたれば）　和の〳〵（めいめい）

備へ（したくして）　身を護る（わがからだをよーじんする）　必要（なくてかなはぬにゅーよー）　警

察官（世の中のそーさーをしづめるやくにん）　裁判官（よしあしを、とりさばくやくにん）　たとひ（よしや）

爭ひ起る（けんくわがはじまる）　是非を決す（よしあしをきめる）　しかせざ

るを正しとす（武器をつかつて是非を決せざるを、まことの正しき道とする）今も尙ほ（いまでもやはり）戰爭（いくさ）得ざること（さうせねばならぬこと）必要ある所以なくては、ならぬわけ）國と時代（その國と、その時○日本と英吉利又は支那と、明治の時と鎌倉時代などとの如し）著き相違（めにたつたちがひ）斧（まさかり）刀。鏃（やのね）鑛物（鐵や金、銀など）鎔かす火の力にて、とろ〳〵させる）及びて（その時になつて）劒戟出來（つるぎやほこができる）甲冑よろひ、かぶと）東西（日本も西洋も）封建時代（諸侯（ショコー●大みょー）が、各土地を領分せしとき○日本にては北條時代より、明治の初年まで）呼ばれ（名づけらる）重ぜられ（たいせつにせられる）火藥（えんしょー●てっぽーぐすり）鐵砲（たまをこめてうちだすつゝ）總躰（すべて）模樣（よーす）變はり。兵制（いくさのしかた）理化學（物理學（物のぜーりを、さはむるが）化學（せいみのがくもん）進歩（ひけすむ）使用（つかふ）巧妙（たくみに、じょーずになる）精鋭（ぜーぐーするどい）驚くべき（びっくりすべき）火器（とび火のぜーぐ○てっぽーなど）しかも（それでも）あきたれり（そもや、まんぞくである）將來（ゆくすゑ○のちく〳〵）豫め（まへから）兇器（人をそこなふうつは）止むを得ざる場合（よんどころなきとき）ものたるを忘るべからず（ものであるといふことを、わすれてはならぬ）殺すにあらずして（人をころすのではなくて）勝敗を決し（かちまけをきめる）爭ひを止む（けんくわをやめる）

第二課　各國の軍備

軍備とは、いくさの、よーいなり、本課は、國々のいくさのよーいは、どんなであるかといふことを、しめしたり

世界各國（およそ、この世にある國といふ國は）國土（その國の土地）人民（たみひと）保護

たもちまもる○注意してまもる **有す**（もつてをる） **位置**（あるばしょ） **事情**（ことがら●よーすがら） **海軍**（うみの上にて、いくさするもの） **重きを置き**（かくべつに、たいせつにする） **陸軍**（くがちにて、いくさする） **英國**（イギリス○英國は、ヨーロッパの西北なる嶋國） **諸處**（あちこち、こちら） **屬國**（ついたくに） **殖民地**（人のをらぬ地に、民をうつしすまはせたる地） **現に**（めのまへに） **海軍力**（海軍にかゝる力） **我が國のに**（我が日本の海軍力に） **比し**（くらべる） **約そ**（ざつと） **佛蘭西**（ヨーロッパの中の一國） **勢力**（海軍のいきほひ、ちから） **露國**（ロシヤのこと） **獨逸**（ドイツ） **伊太利**（以上いづれも、ヨーロッパの國名） **諸强國**（もろ〳〵のつよきくに） **大差等**（おほいなる、ちがひ、しだい） **我れのに** **九倍**（わが日本の陸軍の力に九そーばい） **英**（イギリス） **獨**（ドイツ） **佛**（フランス） **優る**（すぐれてある） **平時**（いくさのなきとき） **戰時**（いくさのとき） **合衆國**（アメリカ） **尤も甚しく**

○おとな 大人
○もろと 諸共
○みくに 皇國

平時と戰時とのちがひがなかなかに、ひどくある **例外**（きそくはづれ） **過ぎず**（こしはせぬ） **隣邦**（となりぐに） **朝鮮**。 **ゆたかならず**（まんぞくにない） **實力**（じっさいのちから） **弱く**。 **隻**（軍艦一そー○ふね一そーを一隻といふ） **軍艦**（いくさぶね） **僅かに**（やう） **全く無し**（まるでない）

第三課　小さき勇士

勇士は、いさましきものをいふ、本課は、年わかき勇士が、兵士となられぬをくやみしを、その母が、いくさに强きばかりを勇士とはいふべからず、わが胸の敵に勝つこそ、まことの勇士であるといふことを、おしへたるなり

おとなであらば（年とりし、おほきな人であるならば） **兵たち**（兵士の、ひとびと） **も**（一しよに） **ろともに** **みくに**（日本をいふ○この御國の） **出陣**（いくさにでる） **功名**（いさはしほまれ） **手柄**（いさはし） **せうものを**（するのであらうものを） **彈丸**（てっぽーのたま）

○こはく 恐ク

○かひもなや 甲斐

○まゝならぬ 自由ナラヌ

○いくさすむ 戰爭、濟ム

ことくなし おそろしくない　**爆裂彈** はしれるたま　**哨兵** ものみのへい　○ばんぺい　**見事に務めらるゝ** りっぱにやくめをつとめるであらう　**立派** みごと　**傳令** でーれいをつたへる

敵 かたき　**砲臺** てっぱーをすえたるところ●だいば　**攻撃** せめうつ　**一番乘** さきがけ　**勳章** てがらあるものに、たまはるしるし○勳章に種々あり いくさにてがらありしものは金鷄（キンシ）勳章をたまはるなり　**貰って** ちょーだいして

名を揚げ ひょーばんをあげる　**とゝさま** 父上樣　**かゝさま** 母上樣　**歷史** だい〳〵のことを書きし書物　**名前** じぶんのな　**强きは** つよいことは　**劣らねど** まけはせねど　**かひもなや** しかたがないことよ　**まゝならぬ** おもふとはりにならぬ　**いくさすむべし** 戰爭がすむであらう　**すべなし** しょーがない　**悔みけり** ざんねんがりました　**諭す樣** さとしきかせることに　**銃持つ兵** てっぱーをもったへいたい　**限る**

かは 銃持つ兵に限つて、外にはないのであるべきか、なか〳〵さうではない　**武人** ぶじん　**さへ** それでさへも　**え勝たぬ** ようかつことのできぬは　**胸の敵** わがむねのうちにあるてき　**ともすれば** やゝともすれば　**邪念ぞよ** よこしまなこゝろであるぞよ　**不柔順** おとなしくないこと　**自分勝手** 父母などのいふこともきかず、わがまゝかって　**うそ** ありもせぬことをいふ　**なまけ** おーちゃくする　**かゝる** このよーな　**務め** すべきみち　**しとぐる** なしおはせる　**いふぞかし** いふことであるぞよ　**鋤** 田をおこすぞーぐ　**鑿** あなをあけるもの　**算盤** ものを、かんじょーするものの名　**取る品** 手に取りあぐるしな　**異なれど** ちがふけれど　**おのれに克ち** じぶんの心にかつこと　**勤む** せいをだす　**ぞや** であるぞよ　**心ゆるむるな** 心をゆるめてはならぬぞよ　**さる人** そのよーなひと　**向ふ敵** むかってくる敵　**家の子よ**

家にある子どもたち 先づ さいしに

第四課 ナポレオンと鑑師

ナポレオンは、一平民まりおこりて、フランスの天子となり、その名全世界にとゝろきわたりし人なりしが、後に敗れて、千八百二十一年即ち我が仁孝天皇文政四年に、セント、ヘレナといふ嶋において死したり○鑑師は、よろひをつくる人。鑑とは、かねをもつてつくり、身にまとひて、彈丸、矢などをさくるためにするものなり、本課は、ナポレオンと鑑師との、おもしろきはなしを書きたるなり

○うそ 虚言
○なまけ 懶惰
○しとぐる 仕遂

一平民 ひとりの、いやしきひと 内外の戰爭 國の内や、國のそとのいくさ○エジプト、イタリヤ、プロシヤ、フランスなどの諸國 大功 おほきなてがら 佛蘭西皇帝 フランスのてんし 位に登り 天子の位につく○千八百四年のこと 歐羅巴。列國 くに 武名 つよきひょーばん 全世界 せかいぢゅー 轟かしき 名をならした パリー フランスのみやこ アルミニュー

○ためたる 蓄シタル

ム 金屬の名 彈丸 てっぽーのたま 輕き 革に等し かはにてつくりしものにおなじ 原料 もとの、しなもの 高價 ねだんがたかい 貴人 身分のたかきひと もとめにあらざれば おたのみで、なかったれば 造り難し こしらへにくい 件 このことをはなしした 召しよびよせる 資を與へ もとでのかねを、やって 成りぬ じょーじゆした 檢すしらべてみる 細工 こしらへかた 精妙 よくできてある 即坐に試みん このばにて、ためしてみたし 汝 そのはー 着しき て 立つべしや 立つてをることができるか おめたる色 おくびょーげなるかほいろ 心得候 しょーちしました 室の中央 へやの、まんなか 放たんとすれど てっぽーを、うたんとすれども 神色自若 かほいろが、つねのごとくに、どうせぬこと いふ樣 いふことには 精神 こゝろ 自信 みづから、たまがとはらぬものと、信じて疑はぬ さ

もあるべし　このよーにも、あるべきこと

あつく　ていねいに

賞しき　ほめました

とぞ　といふこと　とである

第五課　皮膚ノ養生

皮膚は、はだへなり、身躰の表面をつゝみ、外界とさかひをなすもの、眞皮、表皮の二つより成る、本課は、人身にもつとも必要なる、皮膚の養生にかゝることを書けり

○ヤハラカ　乘歌

○アマネク　徧ク

薄クヤワラカ　うすくて、やはらかする

彈力　はじくちから

アマネク包ミ　のこらずつゝむ

護リ　ばんをする　○保護する

作用　はたらき

城壁　しろのかべ

疵口　きずのついてあるくち

傳染　うつる

病毒　やまひのどく

ペスト　病の名○黑死病といふ、極めておそるべき病

黴菌　人の目には見えぬほどの、極めてこまかく、ちさき下等植物をいふ

蓋シ　おしはかるに

備ナケレバ

○イサヽカ　朝

ナリ　よーいが、してないからである

小孔　ちさきあな

絶エズ　たえずきれず　○いつも〳〵

汗。

イサヽカ　すこしは

呼吸　いきをする

弱シ　よはい

外界　からだよりそとの

惡氣　わるきき

侵サレ易シ　せめられやすい

感冒　かぜをひく

粘着　ねばりつく

脂　からだからでるあぶら

垢。塵埃　ちり、ほこり

清潔　きれいにする

入浴　ゆにいる○ゆあみする

襯衣　じばん、シャツなど

交換　きかへる

適當　よいはずに

冷水　ひやみづ

全身

からだ　ぢゅー

注ギ　水をかける

潤ヘル　ぬれてある

手拭　てをぬぐふもの

拭フ。

頗ル　よはど

强健　つよく、すこやか

抵抗　さからふ

効能　きゝめ

衛生　からだを、よーしよーする

第一歩　ていはじめ

力メ　せいをだす

體溫　からだのぬくもり

程ヨク　ほどよ

調ヘ　よいかげんにとゝのへる

人體　ひとのからだ

品質　しながら

選ビ　えりわける

度

○あさ 麻

二應ジ 暑きときと寒きときとによりて、ほどよくする

毛織物 毛にて織りたるもの

木綿物 わたにて

外熱 そとから

體溫 からだのぬくもり

第六課　奈良の舊都

奈良は、大和國添上郡にある有名の地なり、舊都は、ふるさみやこなり、本課は、奈良にかゝることを示したるなり

七條 京都市の南端にして、ステーションの在る處

舊き都 奈良は、千三百七十年即ち元明天皇和銅三年に、此地に都したまひしより、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁、の六帝を經て、千四百四十四年、即ち桓武天皇、延曆三年に至るまで、七十五年間の都のありしところ也

あと 都のありしあと

名所 名たかきところ

市街 まち

春日山 山の名

三笠山 山の名

麓 ふもと

春日神社 官幣大社なり、燈籠の多きと、鹿の多きとを以て能く子供にもしらるる

天兒屋根命 神の名○神皇產靈神（カンミムスビノカミ）の御子なり、天孫降臨のとき、したがひてこの國に下りたまふ、藤原氏の祖先なり

祀れる まつってある

境內 春日神社の社地內

老杉 ふるきすぎ

生ひ茂り はひしげつてをる

社殿 やしろのこと

莊嚴 きれいにして、いかめし

馴れ よくなづく

群む れ

林間 はやしのあいだ

四山 春日山、三笠山、芳山、花山、

公園 おほくの人が遊ぶところ

東大寺 七大寺の一とす

大佛 聖武天皇の建立にして、天平十七年よりはじめ、天平勝寶元年に工をおはる、其間三年を費し、翌年開眼す

安置 やすんじおかれる

像 大佛のすがた

五丈三尺五寸 その各所の長さを略記すれば、面の長さ一丈六尺、目の長さ三尺九寸、鼻の長さ三尺七寸、高さ一尺六寸、肩のさしわたし二丈八尺七寸、胸の長さ一丈九尺、腹の長さ一丈八尺、臂の長さ一丈九尺、左手の大指の長さ四尺四寸、回り四尺八寸、手のひら長さ六尺五寸六分、膝の前徑三丈九尺足のうらの徑一丈三尺なりといふ

聖武天皇 第四十五代の天子なり

勅願 天子の御願○皇統の万代不易と、我國人民より禽獸蟲魚草木等の盛ならんことを祈らんと

建立 はじめたてる

鑄造 ねてつくる

金銅 からかね

九十萬斤 一斤は、百六十目なり、十四万四千貫目をいふ○熟銅七十三万九千餘斤、白錫一万千六百餘斤その他練金、および水銀等を費したり、これに要

せし木炭は、一万六千三百五十六石なりしといふ

費し（つかふ）**當時**（その時）**佛法**（ほとけのほー）**御**

遺物（おんかたみ）**藏め**（しまつてある）**歴代**（御代々の天子）**勅封**（天子のみことのりにて、ふうをあけ、又封をするところ）**寶庫**（御たからもの、のいれあるくら）**美術**（おもひをこらして、人の心をなぐさむるわざ、書、畫、詩、歌などの類）

模範（てほん）**歴史**（世のうつりかはりをかきたる書物）**參考**（かんがへあはせる）**珍品**（めづらしきしな）

博物館（いづれの國、いづれの時、いかなる物にかゝはらず、多くの物を集めて、人に見させる處）**什物**（たからもの）**衣**

懸柳（宮女采女（ウネメ）が身をなげる時、衣をかけしといふ）**垂れ**（たらす）**南圓堂**（興福寺の寺内にある有名の堂なり）**五重塔**（興福寺の境内の南端にそびえ、高さ十五丈六尺といふ）**影を映し**（かげが、猿澤の池の水にうつる）**風景**（けしき）**繪の如し**（まことに）**二月堂**（繻草（ワカクサ山）の山腹にあり、毎年二月堂の水取とて參詣者多し）**三月堂**（繻草（ワカクサ山）の北にあり法華堂とはこゝなり）**法隆寺**（聖德（ショートク）太子の建立せられしものなり、關西鐵道の法隆寺驛より北十町餘にあり）**奈良朝時代**（奈良に都のありし時○この解は、前の舊き都を見よ）

遺蹟（のこりたるあと）**さながら**（ちょーど）**たどる心地**（さぐりあるくこゝろもちがする）**御代**（おんときぬ）**帝都**（天子の宮殿のありしみやこ）**所謂**（いふところの）**はるかに**（とはく）**皇居**（天子の宮居）**距る**（へだてはなれる）**許は**（ばし）**ありき**（ありました）

第七課　張良

張良とは、支那の漢（カン）の世の人にして、名高き人なり、今より凡そ二千百餘年前の人、本課は、張良が、黄石公（コーセキコー）より、兵書を得て、漢の高祖をたすけたことを書けり

古木繁り（ふるき木が、はえしげる）**しん〳〵と**（樹木の生ひ茂るさま）**小暗き**（こぐらい）**細谷川**（ほそきたにがは）**瀨音**（水のはしりながるゝおと）**白髮**（しらが）**黄衣**

○かなた 彼方

○かたし 片足

○おり 下り

○はかせ 穿カセ

きいろのもの きをきる 翁 より 驢馬 ○小き馬 うさぎうま にてつくりしは し○下邸の圯橋 さしかゝる 橋の上をわたりかける かなた 一青 年 ひとりの、年わかきもの 長劍横たへ ながい、かたなをこしによこたへる 行きちがふ 老人と、行きかはる 老人の沓 白髪黄衣のとしよりのはきたる、くつ いかにしけん どうした ものでわるか かたし かたかたのあしのくつ 浅瀬にもまれ 川のあさきところにて、水にもまれる やい コラとおなじ、人をよぶことば 若き男 わかいをとこ あの沓とれ あのながれゆく沓をとつてこい 傲然として ほこりがましく 命じける いひつけました 怒る色 はらをたてたかほいろも 岸べ きしのほた おりたち 下りてゆく 追ひとめて おっかけてひらふこと 馬上 うまにのってをりながら はかせよ その沓を、足にはかせよ 餘りの

七十

○わかうど 若人

○ふしぎ 不思議

○なまけもの 懶惰者

無禮 あんまり、しつれいな 老人なれば としよりであるからとて 思ひかへし かんがへなほして いとねんごろ よほど、ていねいに にっこと わらふかたち 見上 げたり おもひのほかかんしんした わかうどよ 若き人よ 忍耐 かんにんづよき ○沓をとつたり はかせしたりせしこと ひそかに教ふる そろっと、ひきかせる 五日の後 今日より 五日のち ふしぎ わからぬこと 思ひしか おもひましたが 仔細あらん これには何か、わけのあること ひき明けかた 夜のあけよーとするとき 既に もはや あゝ ためいきすること 遲し おそい〳〵 なまけもの やくにたゝぬ、おーちゃやくもの 性根 こころが 出直せ 今一度出て來い 罵り わるくちをいふ 既にあり もはや、來てをる 五日の 日後 のち 約束 とりきめる きっと思案なし こゝろをきめてかんがへる

七十一

いねず（ねもせぬ）前夜（まへのよ）老翁（としよりのおきな）稱讃し（ほめたたえる）足るべけれ（まんぞくに、あるべきである）剛毅（心づよくして、もいのに屈せぬこと）今しも（たいまは）天下亂れ（よの中が、あやなし、）一卷（まき もの）熟讀（よく〳〵よむ）賢き君（かしこい天子の）轉佐（たすけやく）四百餘州（支那の國中をいふ）鎭め（いくさをしづめ、さだめ）兵書（いくさのことのかいた書物○六韜（ロクトー）三略（サンリャク））授け（てわたしする）忽然（たちまち）功積みてがらをつむ○しゅぎょーする）他年（のちのとし）高祖（漢の天子、沛公（ハイコー））助けつゝたすけながら）前漢（漢は、前漢、後漢とわかる、前漢は、我國の紀元四百五十九年孝元天皇の十三年に始まり、後漢は垂仁天皇の五十四年にはじまり、應仁天皇の二十年におはる）ふ、よいひょーばん）傳へし（のちの世にまで、傳へた）智勇（ちえと、ゆーきと）美名（智勇のある人とい

第八課　臺灣

臺灣は、もと支那の領地なりしを、明治廿七八年の日清戰爭の後に、我國の領土となりたり、本課は、その臺灣にかゝることを、くわしく書き記したり

琉球（西海道の南西にある島國の名なり）臺灣海峽（海峽とは、陸地と陸地との間に海の挾まる名）清國（支那）相望み（たがひに、ながめあふ）群嶋（むらがりおつまるしま）相對す（むかひあふ）全嶋（しま）面積（ひろさ）地勢（とちのなり）龜の甲（かめのせなかのよーに、中がたかくてひろい）突兀（ぬきんでそびへる）急に（水の勢がはやく）注ぐ（ながれこむ）乾燥の候（かはくとき）悉く涸れ（のこらず、水がなくなる）降雨の季（あめふりのとこー）漲溢（みなぎりあふれる）砂礫（すなやこいし）塡塞（うづめふさぐ）最大（一ばん大きい）總督府（すべおさめるやくしょ）

○おしなべて　總跡

○あなゝす　風梨

良港（よいみなと）　**起點**（はじまりのところ）　**百貨輻湊**（おほくのしなものが、あつまる）　**貿易**（こーえきすること）　**おしなべて**（ひつくるめて）　**炎熱**（あつい）　**極暑**（このうへなしにあついとき）

海風（うみから、ふいてくるかぜ）　**堪へ難き**（あつさに、こたへかねる）　**肥沃**（こえたる）　**繁茂**（しげる）　**あなゝす**（くだもの、梨（ナシ）の一種）　**著名**（名のあらはれた）　**未開人のみ**（まだひらけぬひとばかり）　**占領**（しめとる）　**明人**（明國の人）　**有**（もちもの）　**一名**（またのな）　**據り**（よりどころとする）　**明朝**（明の世の朝廷）　**再興**（ふたゝびおこす）　**滅ぼされ**（つふされる）　**爾**

來（それよりのちは）　**領地**（もちもの）　**征清の役後**（支那をせいばつしたゝ、いくさののち）　**澎湖**

列島（臺灣本嶋の西にあるしま）　**版圖**（りょーぶんの土地）

第九課　山田長政

本課は、山田長政が暹羅に渡りて、其威名を四隣にとゝろかしたることを書きしなり、事は本文に詳かなり

通稱（とはりな）　**好みて**（すいて）　**兵書**（いくさのしょもつ）　**時しも**（このときちょーど）

內國（日本の內）　**英名を博せん**（すぐれたる、ひょーばんを、世にひろめたい）　**海外**（日本の外）

或は（ことによれば）　**雄志を伸ぶ**（おほいなるこゝろざしをのべる）　**密かに**（こっそりと）　**暹**

羅（支那の南端にあり、臺灣より西南にへだゝる國）　**隣國**（となりぐに）　**敗軍**（まけいくさ）　**兵法**（いくさのしかた）

其の意見（長政のかんがへ）　**詢ふ**（はかりつねる）　**奇策を獻じ**（めづらしい、はかりことを、まをしあぐ）　**任じ**（いひつける）　**委ぬ**（まかせる）　**征討**（せいばつする）　**當國**（暹羅國）

流寓（ながれよる●さまよふ）　**招集**（まねきよせる）　**甲冑**（よろひかぶと）　**土兵**（とちのつはもの）　**總**

勢（すべてのにんず）　**援兵**（たすけのへいたい）　**號し**（いひふらす）　**克ちぬ**（いくさにかつた）　**怒**

○おびき 誘キ

○めあはせ 縁セ

る はらを たてる **驅り催し** かりたてる **海陸** うみと くがと **三隊** みく み **伏兵**

を設け かくしたるにんずをしかける **おびき** あざむき **時分を圖り** よいときをみ

はからひ **挾み擊ち** 兩方から、はさみうちにする **敵兵** 六昆の兵隊 **死傷** しんだり、けがしたりする

擒 いけどり **功を賞し** てがらをほめる **めあはせ** よめにやる **封じ** ちぎょーをやる

國政 くにのまつりごと **威名** つよきひょーばん **赫々** さかんなるかたち **震ひ** ひゃく

殂し しぬる○おかくれになる **職を辭し** やくめを、ことはりする **奸臣** わるきけらい **相**

謀り そーだんしあふ **弑し** けらいが天子をころすこと **位を奪ひ** 天子の位を、ひりにとる **義**

兵 義のために、おこるいくさ **却つて** けっく **計られ** たくまれる **毒殺** どくをもってころす

富貴を極め この上なく、とみみぶんがよくなる **尙ほ** まだ **懷ふ** なつかしくおもふ **產**

物 邏羅にできたるもの **故國** ふるさとのくに **恩を謝し** 國のめぐみをれいをいふ **畫工** ゑかき **戰爭の狀** ひくさのありさま **寫さしめ** ゑにかかせる **商船に託し**

わきなひのふねにたのむ

第十課 象

象といふ獸のことをはなしたる課なり

陸生動物 くが地に生れるけもの **亞細亞。印度** 天竺（テンジク）ともいふ **亞弗利**

加。深林 ふかきはやし **棲メリ** すみかとしてをる **毛疎ラニ** 毛がばらくとはへてある

四肢 四本のあし **太ク** おほきい **行歩遲緩** あるくことが、ぬるい **屈伸自在**

まがったりのんだりすることが、おもふまゝである **頸。口ニ送ル** くちにはこぶ **獅子。虎** 二つながら、

たけき けもの 他獸 ほかの けもの 鬪フ けんく わする 稀 すく ない 怒ル はらを たてる 巨大 おほきな 踏ミニジリ ふみつぶす 鋭キ とがつた 牙ニ貫キ きばにて、つきとほす

遠ク擲チ えんぱーへ、なげつける 死ニ至ラシム 死ぬるよーな目にあはせる 感覺 さとり 鋭敏 するどく さとし 逐ヒ おつかける 微小 ちい さい 浴ス からだをあらふ 湖沼 みづうみ、ぬま 吸ヒ。 體ニ注グ からだにかける 巧ミニ じょーずに 全身ヲ洗フ からだぢゅーをあらふ 森林ヲ過グ もりや、はやしをとほる 牝象 めんの ぞー 年長 としうへの 前後ヲ固メ あとさきを、よーじんする 隊伍ヲ整へ くみを、そろへる 如何ニ どんなに 防衛ノ用意 ふせぎまもるよーじん 細ヤカ ゆきとゞいてをる

○あざみ 蘭

第十一課　生物の競爭

生物とは、すべて天地間に、いきあるものをいふ、競爭とは、せりあふことなり、本課は、すべての生物が、たがひに競爭するわけ、およびその有樣をのべたるなり

生れながら うまれた そのまゝ 自衛の具 みづから、わが身をまもるぐー 植物 草木の類 薔薇 草にして、花は牡丹に似たり、香を賞す あざみ 草の名、春の初め芽を出す、葉と莖とに、多くの刺あり、花は紫又は白等なり 刺 とげ なり いらぐさ とげのあるくさ 毒汁 どくの しる 要する理 いるといふ、わけは、いかゞ 繁殖 しげく ふえる 容るゝ能はざる いれることのできぬ 生存の競爭 いきながらへることのあらそひ 蓋し おしは かるに 自然の勢 おのづからなる、ありさま 莊子 支那の宋の國の人、莊周といふ 澤 ひきくして、沼の如く水あるところ 窺へる

ねらつてをる **捕へ**（いけどる） **竊かに**（そろつと） **逃げず**（にげてゆかぬ） **鰕をね らひ**（鰕の居るをつけねらふ） **迫る**（人のそばによつてくる） **小蟲**（ちさきむし） **覺えず**（おぼえずしらず）

棄てる（なげすてる） **歎じき**（ためいきをついてたんそくする） **慾に**（ものはしさに） **眼くらみ**（目がみえぬ） **災**（さいなん） **諷したる**（おぼよそからいましむ） **喩へ**（たとへごと） **趣**（よーすもむき）

相擊ち（たがひにうちあふ） **相食まん**（たがひに、くひあはんとする） **隙**（ひまき） **優勝**（ゆーしよー）

劣敗（すぐれたものはかち、おとれるものはまける） **外る**（はづれる） **特に**（ことさらに） **居處を**（きよしよ）

爭ひ（ねどころをとりあふ） **炎天**（夏のあつきそら） **焦土**（やけたるつち） **徘徊**（ゆきつ、もどりつする）

待つ（蟲のあみにかかるをまつ） **同類**（おなじなかま） **激烈**（はげしい） **所以**（わけから） **察す**（さつす）

かんがへてみる **進化の結果**（世のうつりゆく、できばえ） **境遇**（ばあひ） **驅られ**（かりたて

○尺とり蟲 尺蠖

られ **尺とり蟲**（蟲の名○そのあゆむさまが、尺をとるに似たるむし） **忽ち**（すぐに） **然りしに**（さうあつた） **非ず**（さうのではない） **偶然**（おもひよらず） **燕**（つばめ） **雀**（すずめ） **危害**（あやふきさいなん） **遺傳**（おやからのゆづり） **動作**（しぐさ○しわざ） **色により**（色が木や石と似てをるなどのために） **惡臭**（あしきにほひ○くさきこと） **然らざるはなし**（さうでないものはない）

第十二課　珊瑚島

本課は、珊瑚島はいかなるものや、何れにあるや等のことを書きたるなり、珊瑚島といふことは、本文につまびらかなり

太平洋（アジヤと、アメリカとの間のうみをいふ） **印度洋**（印度の南にあたるうみなり） **赤道**（地球の南北の中央にして、もつともあつきところなり） **往々**（ときとしては） **奇異**（めづらしき） **譬へば**（たとへてみれば） **環**（まるき、わ） **漫々**（ひろびろたる） **圍繞**（かこみめぐる） **椰子樹**（木の名○熱帶に生ずる木にして、みきは

○もも 抑

直立し、葉は、こずえにむらがり春花さく **繁茂**（しげってをる） **風景**（けしき） **頗る愛すべし**

よほど、しょーくわんされる **珊瑚蟲**（小さき蟲の名） **通常**（ひとと ほり） **そもそも**（そも） **如何**（カ）

にして（どのよーにして） **微小**（ちいさき） **下等**（一ばん、くらゐのひくき） **一處に群**（シヨ）

生（ひとつところにむらがる） **海底**（うみのそこ） **嶋嶼**（しま、こじま） **周圍**（まはり） **炭酸**（タン）

石灰（礦物（コーブツ）の名） **物質**（しなもの） **分泌**（からだの中からだす） **骨質**（ほねのたち） **堅**（カタ）

き（かたい） **次第に**（だんだんに） **水面に現る**（水の上に、あらはれる） **工事終**（コーシ）

る（しごとがすむ） **波濤**（おほなみ） **砂利**（すなのわらきもの） **珊瑚**（海の中に産する蟲の名○赤、白などあり、珠（タ

こ）として賞す） **碎片**（くだけたるかたわれ） **及ばざる**（とゞかぬ） **達せしむ**（ゆきとどかせる） **潮**（うしほ） **うみのしほみづ** **種子**（たね） **漂ひ**（ながれくる） **附着**（くっつく） **枝葉**（えだやは

や） **叢**（くさむら） **一種特別**（一トさま、べつだんな） **構へ**（家をこしらへ） **環内**（わのよーになる） **自然**（おのづからなる） **暴風**（あらきかぜ） **船舶**（大ぶねも小ぶねも） **難を**（風にあひて、

なんせんするひを） **避くる**（よける） **屢々**（たびたび）

第十一課 南洋諸嶋

南洋諸島とは、世界の南方の海洋中にある、すべての島々をいふ、本課は、その島々のことを書きしめしたるなり

跨り（またがる） 赤道を中にして、兩方にまたがる ○赤道は、前にこれをときたり **散在**（ちらかってある） **總面積**（すべての

ひろさ） **大別**（おほわけする） **群嶋**（むらがり、あつまったしま） **成る**（できてをる） **西半部**（ニシハンブ）

西の方の半ぶん） **除くの外**（のけて、そのほか） **大抵**（おほかた） **北米合衆國領**（ホクベイガッシューコクリョー）

北アメリカの、合衆國の、しはい地） **距る**（はなれる） **移住**（うつり、すまゐする） **首府**（みやこ） **最と**（サイ）

し 一ばんとする 良材 よいざいもく 輸出 ほかの國へおくりだす 大半 はんぶんすぎ 和蘭 ヨーロッパの國の名 屬しく 金剛石 だいやもんど 殆ど おほかた 發見 見いだした

英國 イギリス 漸次 だんだんと 農業 ひゃくしょーのするわざ 工業 さいくごと 起こり はじまる 採鑛 鑛石(コーセキ)とて、あらがねをほりとる 漁獵 漁は、魚をとること、獵は鳥けものをとることを

い利 とれだか ふ〇まうけ 羊毛 ひつじのけ 獸皮 けものゝかは 眞珠 かひのたま 葡萄

くだもの 漁業 すなどりのわざ 我が勞働者 日本の、はたらきびと 從事 しごとをする 密

なる關係 したしく、はなれがたき、かゝはりのある 近年 ちかきとし 米國領 アメリカのりょー

ぶん 四國 阿波、讃岐、伊豫、土佐をいふ、四國の面積は、千百八十方里餘なり 人口 ひとのかず 土人 そのとち

の人 半數 はんぶん 出稼人 かせぎに出たるひと 就中 とりわけ〇そのなかでも 占む

わがものとしてをる 大都 おほきなみやこ 土蠻 土地の、ひらけぬひと 部落 くみのひと 荒

野 あれたるのはら 匹敵 ちょーど、それとくらべられる 交通 ゆきたりきたり 貿易 しなものを

する 主として おもに 輸入 おくりいれる 絹布 きぬの、おりもの 綿布 もめんの

おりもの 雜貨 いろいろのしなもの

第十四課　地球はまるし

地球とは、われ〳〵の住居する世界をいふ、本課は、地球はまるさものであるといふことを明らめしめんが爲めに、書きたるものなり

居すわりて ぢつと、すわりてをること 平たき たひらなるもの 實は然らず まことは、さうでない 空間に懸り そらに、ぶらさがる 絕えず きれず、たえず、いつも〳〵 回

轉 くる〳〵とまはる 海岸 うみのきし 雙眼鏡 兩方に見るところある、ぼーえんきょー 出帆 ふねに、

のって　船躰　ふねの　隱れ　下部　上部　沖
でる　からだ　みえぬ　したの　うへの
うみの、陸地をはるか　證據　檢ぜよ　限りな
にはなれしところ　うごかぬ　しるし　しらべて見よ
く　はてしがない　航海すと思へ　進むにつ
れ　すゝめば、すゝむほど　實際　西行　同樣の結果
まこと　とは　にしに　ゆく　おなじ、できばえ
見ん　みること　一周の狀　さとるべし
であらう　ひとめぐりするありさま　がてんすべき
ことである　端は　未だ曾て　一證　既に
て　まだ、とんと　ひとつの　しょーこ　もはや
續きたるか　つゞいたのであるか　出入するぞ　解すべ
でいりするのであるぞ
からざるにあらずや、　わからぬことではないか　球形
わからぬことである　たまのよーに
、まるさかたち　理ぞーり　ほゞ　想像　足るべし
ほゞ　ざっと　おもひ、かんがへる　まんぞく

であらう

第十五課　コロンブスの亞米利加發見上

コロンブスは、伊太利のゼノアの人にして、亞米利加を見出したる人、なり、本課は、次の課とつゞきて、その發見せしことからの始末を書きしなり

諸國　もろ〳〵のくに　開けず　人の智慧がひらけぬ　由すら　わけでさへ　伊太利
ヨーロッパの國名　羊毛商　ひつじのけのあきんど　家貧し　いへが、びんぼーな　教育　おしへそだてる
力を盡し　力の入れられたき入れる　地理　土地のことの學問　數學　そろばん　航海　ふなの
の　天文　てんのことをしるがくもん　諸學科　もろ〳〵のがくもん　修め　しゅぎょーする　加

ふるに（その上に）生活を營み（くらしをする）風習（ならはし）感化（感じあら）

たまる水夫（かこ○ふねのはたらきびと）夙に（はやく）長じ（たけた）歐羅巴。亞

弗利加。亞細亞。印度（てんぢくともいふ、アジヤ洲中の國名）新航路（あたらしきふなみち）

事業（わざ）日を逐ふて（一日一日と）多年（なんねんもなんねんも）研究（しらべ）

信じ（まことと、おもふ）航し（ふねにのって）大西洋（歐羅巴と亞米利加との、間の大洋）經

て（とはりて）筈（わけ）見馴れぬ（多く見たことのない）器物（うつはもの）漂ひ（ながれ）

明かなり（きまつたこと）達す（ゆきとどく）功ならん（てがらであらう）注

目（めをつける）西航（にしにむかつてふねにのる）自費（じぶんのにゆーひ）有力者（きつとした、

やくにたつもの）說き（はなしをする）資を求め（もとでをだしてもらふことをたのむ）耳を傾く

（はんきに、きくもの）絕えてなかりき（一人もなかつた）葡萄牙。西班牙（二國とも、ヨーロッパの國）何の効（なんのきゝめ）謁し（おめどほりする）熱心（ほんきに）意見

（かんかい）佛國（フランス）英國（イギリス）思ふ折から（おもふてをる、ちょーどそのとき）皇

后（きさき）憫み（ふびんにおもふ）寶玉類（たから、たまなど）典賣（しちにいれたり、うつたり）

巨額（たくさんの）金額（かね）調ひ（できた）同伴者（つれのひと）募る（めしあつめる）死地に就く（しにに、ゆく）募集に應ず（めしあつめに、おーじて、でるもの）百

方周旋（いろ〳〵とかけまはる）辛うじて（やつとのことで）西洋紀元（西洋の紀元元年は、我が神武天皇紀元、三百六十一年に當る）齡（とし）

第十六課　コロンブスの亞米利加

○もとより固ヨリ

○かばかり斯計

發見 下

茫々（ぼーぼーとしてひろし）海原（うなばら）大空（おほぞら）暴風（ぼーふう）に遇（あ）ひ（あらきかぜにであふ）

舵（かぢ）を損（そん）ぜし（舵は、舟を上下左右にするもの、その舵を、こわしたり）空（むな）しく（なんにもなく）一團（いちだん）

の浮雲（ふうん）（一トかたまりの、うきぐも）云（いは）ん方（かた）も（いひよーも）蒙昧（もーまい）（物事にくらき）漸（やうや）

く（だんだんと）覺束（おぼつか）なく（なんともわからぬこと、）彼等（かれら）（水夫をさす）疑（うたが）はしく

ふしんなこと）漂流（ひーりゅー）（たゞよひながれる）危（あや）む餘（あま）り（きづかふものから）怨（うら）み（にくむ）怒（いか）り

はられてる）非難（ひなん）し（わるく、とがめる）罵（ののし）り騒（さわ）く（わるくちをいひ、さはぐ）もとより

（もちろん）企（くわだ）て（おもひたつ）かばかり（これば かり）動（うご）ずる（うろたへる）莫大（ばくだい）

（たくさんの）賞（しやう）を與（あた）ふ（ほーびをやる）辛抱（しんぼう）（つらいをこらえる）勇氣（ゆーき）（いさましきこゝろ）影

だにも（影だに）絶望（ぜつぼー）（あきらめる）果（はて）は（どゝのつまりは）無智（むち）（ちえのない）派

遣（けん）さしつかはさる）輩（やから）さへ（ひとたちも）反抗（はんこー）（コロンブスに、反對して、こだはる）色（いろ）を顯

し（かはいろが見へる）歸國（きこく）（くにかへる）自由（じゆー）（こゝろのまゝ）殺意（さつい）を抱（いだ）く（ころさんとする

る、こゝろがまへする）是非（ぜひ）なく（よんどころなく）約束（やくそく）（とりきめをする）夜（よ）の目（め）も

あはせで（夜も、ろくにねず）甲板（かーばん）（ふねのかんばん）期限（きげん）（とき、きり）はや（もはや）

絶（た）えなん（たえよーと）夕（ゆふ）べ（日ぐれかた）細工（さいく）を施（ほどこ）せる（さいくのした）木（き）

片（へん）（きのきれ）果樹（くだもの、なる木）程遠（ほどとを）からず（間が何はどもない）悅（よろこ）び勇（いさ）

み（よろこんでげんきづく）地平線（ちへいせん）（海の上と、まつすぐのすぢ）數點（すうてん）（五つ六つ）火光（くわこー）（ひのひかり）認（しん）

め（みとめる）翌（よく）（あくる日）叫（さけ）び聲（こえ）（大きなこゑ）船員（せんいん）（ふねのひと）狂氣（きちがひ）

望めば（ながむれば） 薄らみゆく（うすくなりゆく） 朝霧（あさのきり） まさしく（まに） 一帶（ひとすぢ） 喜び（うれしさ） 果して如何なりしぞ（ほんとうに、どんなであたのであらうぞ） 報を齎らし（しらせをもつて） 一旦（ひとたび） 再三（二度も三度も） 上陸しき（陸地へあがりました）

第十七課　ワシントン

ワシントンは、亞米利加合衆國初代の大統領として、有名なる人なり本課は、ワシントンの功ありしこと、および戰爭中にありし一事を示したるなり

豪傑（すぐれたつはもの）、獨立戰爭（合衆國は、もと英吉利の領地なりしを、獨りて立たんとして、戰爭を起こせしなり）、大總督（そーだい）大統領（國をすべおさ）こは、紀元千七百七十五年にして、後桃園天皇の安永四年にあたれり

むるやく○天子のごときものにて人民より撰擧せしものなり◎亞米利加にては、四年目毎に交代する定めなり　百七十年ほどワシントンの生れしは、千七百三十二年にして、明治三十四年より百七十年目前のこと　領地（りょーふんの土地）　虐政を施して、明治三十四年より百七十年目前のこと　しければ（むごき、まつりごとを、しましたれば）　國人（合衆國の人）　憤激（きびしく、はらをたてる）　協同（申し合せて心をあはせ、力を同じくして）　叛旗（英吉利に、ひほんするはた）　ひるかへしぬ　族をひら〳〵させる、といふことにて、むほんのいくさをはじめること　指揮（さしする）　折柄なりき（その時であつた）　工兵曹長（作事をする兵隊の、こがしら役）　壘の上（とりでのうへ）　梁材（はりにする、ざいもく）　人手足らざりし（人數がなかつた）　工事（ふしん）　いと（よほど）　困難（なんぎ）　勿躰ぶりて（おもゝしげなるよーす）　徘徊（ゆきたり、もどったりする）　指圖（しごとを、いひつける）　平服（ふだんのきもの○ぐんぶくでない）　一官吏（ひとりのやくにん）　よぎりけ

る　そのところを とほりました　振舞　しょさ　餘りとや見たりけん　あんまりなし

よさであると、見た でありましょー　會釋し　あひさつする　足下　あなた　手傳はれぬ

おてつだいを なされぬぞ　傲然　はこりかましく　徐かに　そろ〳〵　上着　うへにきたるもの　脱

ぎ　ぬぎす てる　群に入り　なかまになる　了りぬ　すみました　かゝる場

合　このよーな、人手 のたらぬとき　通知　しらせ　悠然　ゆったりとして　思ひかけき

や　おもひもよらぬことである　慚ぢ　はづかしがる　傲慢　はこり、わかまゝ

第十八課　短篇一束

短篇とは、みじかき文なり、一束とは、ひとつがねにする なり、本課は、短き文を、一束として書きたるなり

大穴の坊様　坊様は、寺のぼーずのことなり、 このわけは本文を見て知るべし

或里　なんとかいふ　僧住み　ぼーずが、すまゐする　庵　寺のちさきいへ　呼びぬ

名をつけ ました　快からず　おもしろくないことに　切株　木のきったねもと　異名　べつの名をつけて

猿を捕る奇法

奇法は、めづらしきしかたなり、猿をとらへるしかたを書けり

或地方　あるところ　瓢簞　口の小くして、内の大きなる物　挿し　さしこむ　辛うじて

なんぎして　足れど　それだけはできるが　拳　手をにぎりたる　適せざる　よいほどでない　狼

狽　うろたへる　解く　にぎりこぶしを、ほどく　終に　とうく　獵夫　かりするひと

かんがるー

濠洲　南洋の大なる島　何クレト　なにやらかやら　手帳ニ留メ　てびかひのちょーめん

につける　タマ〳〵　おもはず ●ふと　腹膨レ　獣の腹がふくれる　和蘭語　おらんだのことば

圖（かんがるー の繪圖）本國（和蘭をいふ）全世界（世界中）近年（ちかごろ）調べ（とりしらべ）土語（オーストレリヤの土地の人のことば）意味（わけから）

第十九課　王政維新

王政は、天子の御政治なり、維新とは、あらたまることをいふ、本課は、日本の政治が、一時は武門に歸したりしを、維新になりて、天子より御政治をなさせらるるようになりしことを書き示したるなり

親ら（天子樣御ししんに）政權（まつりごとをするちから）執らせたまふ（御もちあそばさる）ならはし（しきたり）源頼朝（源義朝の第二子）將軍（征夷大將軍となる、紀元千八百五十二年）幕府（武家の政事を執る所）鎌倉（相模國）開き（はじめる）武人（武家の人）遷り（わたる）あれども無きが如く（あることは、あつても、ないとおなじこと）幕府の末

幕府の後になりて○德川家慶（イヘヨシ）の時にして、天保、弘化のころなり、家慶は、德川十二代の將軍なり外國（西洋）交渉（まじはり）か、はる開國（くにのみなどをひらいて、外國人を來らしめ、交際貿易するをいふ）攘夷（あびすをはらふ○外國人をはらひのけて、入らせぬと）二派（ふたわかれ）威權（いきほひ、ちから）衰へ（すくなくなる）慶應三年（今上天皇御即位の初年）時勢（ときのよーす）爭ふべからざるを察し（爭はれぬといふことに氣がついて）奉還（朝廷へおかへしまをす）軍職をも辭し（征夷大將軍といふ、やくめまでもことわる）御親政（天子が、御自身に政治をあそばさる）所謂（世にいふところの）公武の別（公家と、武家との）わかち除かれ（やめらる）士（さむらひ）農（ひやくしょー）工（さいくにん）商（あきんど）階級（くらゐ、しだい）廢せられ（やめられる）門閥の弊（家がらのよいものが、上の役になるわるきなら）才能（ちえはたらき）登用（あげもちゐらる）社會（よの中）面目（よーす）王

政維新（せいいしん）朝廷のまつりごとがあらたになる　**臣僚中**（しりょうちゅう）のうち　**會津**（あいづ）國岩代　**桑名**（くわな）伊勢國　**二藩主**（にはんしゅ）會津の藩主松平容保、桑名の藩主松平慶永　**擁し**（ようだきこむ）　**一時**（いちじ）たび　**朝**（ちょう）**命**（めいれい）ちょーていの　**抵抗**（ていこう）こだはり、はむかふ　**天神地祇**（てんじんちぎ）天の神、地のかみ　**畏**（かしこ）**も**（おそれおほくも）　**五事の御誓約**（ごじのごせいやく）五つのことの、御ちかいやくそく◎五事は、（一）廣く會議を起し万機公論に決すべし（二）上下心を一にし盛んに經綸を行ふべし（三）官武一途庶民に至るまで各々その志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す（四）舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし（五）智識を世界に求め大いに皇基を振興すべし、となり　**御旨意**（ごしいめい）おぼし　**大要**（たいよう）あらまし　**會議を興し**（かいぎをおこし）そーだんをはじめる　**公論**（こうろん）天下の多くの人の論する正當の議論　**國益**（こくえき）くにのりえき　**官民**（かんみん）朝廷の役人も、下の人民も　**差別**（さべつ）わかち　**志を遂げしめ**（こころざしをとげしめ）おもふこゝろをしとげさせる　**活動**（かつどう）はたらかす　**舊來**（きゅうらい）むかしから　**惡習**（あくしゅう）わるきならはし　**智識**（ちしき）ちえと、けんしき　**皇威**（こうい）わが國の

いきほひを、はなちあげる　**國會**（こくかい）日本の國々よりえらびだしたものゝよりあふこと　○帝國議會にして貴族院と、衆議院とに分かる　**蓋し**（けだし）おしはかるに

第二十課　市町村（しちょうそん）

市とは、町の大なるもの、東京、京都、大阪などの家數多きところ、町は、まちにして、家の並びて多く建てるところ、村とは、むらにして、いなかのことをいふ、本課は、市町村の區別より、その他これに係ることを示せしなり

廣狹（こうきょう）**ニ應ジ**（におうじて）ひろいと、せまいとにおーじて　**餘ル**（あまる）それよりおほし　**充タザル**（みたざる）それほど　**往々**（おうおう）をりゝ　**マガフ程**（まがふほど）まちかふほど　**人口**（じんこう）ひとかず　**内外ニ過ギス**（ないがいにすぎす）うちそとくらゐのこと　**公共事務**（こうきょうじむ）多くの人か、共同して、なすべきつとめ　**監督**（かんとく）とりしまり　**處理**（しょりばく）とりさばく　**自ラス**（みづからする）じぶんにする　**制度**（せいど）たてかた　**自治制**（じちせい）みづからおさむるたてかた

○マガフ　凝フ

市町村會（シチヨーソンクワイ）　市會、町會、村會をいふ、會とは、其地の議員が會議するをいふ

設ケ（こしら）へる　**機關**（キクワン）から

住民（ジユーミン）すまねする ひと　**共有**（キヨーユー）なかま もち　**乃至**（ナイシ）それから　**財産**（ザイサン）たから○土地、家屋、金錢等

使用（シヨー）つかふ　**費用**（ヒヨー）にゆー　**分擔**（ブンタン）わけてひきうける　**義務**（ギム）やくめ　**子弟**（ウイ）子や弟や　**入學**（ニユーガク）學校に入らせる　**水道**（スイドー）みづをひくみち　**權利**（ケンリ）身にそなはりたるちから　**維持**（ヰジ）もちてたへる　**修繕**（シユーゼン）とりつくらふ　**地租**（チソ）とちのねんぐ　**直接國稅額**（ニチヨクセツコクゼイガク）ぢきぢきに、政府に、おさむるせいきんだか　**公民**（コーミン）おほやけのたみ　**滿廿五歲**（マンニユーゴサイ）まる二十五さい　**一戶ヲ構ヘ**（カマ）一けんの家をこしらへる　**治産ノ禁**（チサンノキン）財産權をつかふ力を、とめること　**蒙ラザル限レリ**（カフモ）うけぬそれきりである　**居住地**（キヨジユーチ）すまねするとち　**議員**（ギイン）事をはかるひと　**撰擧**（センキヨ）えらびあげる　**名譽職**（メイヨシヨク）ほまれあるやく　**無給**（ムキユー）きゆーきんなしで　**委員**（イイン）事をまかされるひと　**推撰**（スイセン）おしえらびあげる

第二十一課　商業のすゝめ

商業は、わきなひなり、本課は、商業をすゝめることを、歌につくりしなり

香港（ホンコン）支那の開港場にして今は英國に屬す　**取引**（トリヒキ）物品の賣買をいふ　**繁昌**（ハンジヨー）さかんになる　**みなもと**（源）

大もと（大もと）　**信用**（シンヨー）しんじ、もちゆる○この人ならば、きっとあてになる　**億萬**（オクマン）億は万を万かさねたるなり○たくさんのこと

資本（シホン）もとできん　**かひぞなき**（そのせんがない）　**德義**（トクギ）人のおこなふべき、すぢみち　**守り**（もりはなさぬこと）　**もれなく**（おちもなく、ぬこへも）　**運を賴み**（ウンをたよりにする）しあはせを、　**無益**（もれなく）

山仕事（ヤマシゴト）たしかな、みこみがなくして、万一の利をはかるもの　**相場**（ソーバ）ねだんのかはるをつけこんで、利をとらんとするもの　**きの廢物**（きはもの）

は物（モノ）入用のまぎはにばかり賣るもの○正月の羽子板、五月ののぼり鯉など　**末の見込**（スエのミこみ）後のみさだめ　**豫算**（ヨサン）

○ぢみち 地道
○はしこく 敏捷

もくろみのてあて **決算**（けつさん） 出入を、きっとさんまーする **嚴密**（げんみつ） さびしく、めんみつ **貸借**（たいしゃく） かし、かり **損**（そん）

得（とく） そんと、まうけと **明細**（めいさい） ことこまかに **ぢみち** そろそろと **はしこく** てばやく

働け（はたらけ） せいをだせ **いざ** さあ、それから **便宜**（べんぎ） よきべんり **約束手形**（やくそくてがた） 一方と他方と

約束して、何日に拂ひ渡すといふ証書なり、現金と同じくあつかふ **小切手**（こぎって） 現金は、銀行にあづけおき、切手にて、現金と同じく取引する

爲換手形（かはせてがた） かはせの金を、受取りたる証として、振出人に渡すてがた **重寶**（ちょうほう） べんりのよいもの **段取り**（だんどり） てつゞき

廣告（こうこく） ひろめ、しらせる○新聞に廣告し、又は東西屋に呼びあるかす **見本**（みほん） てがしらともいふ、みせる、しろもの

商標（しょうひょう） しょーばいのしるし **特許權**（とくきょけん） 政府へ願って專賣のゆるしを得たる權利 **登記**（とうき） 裁判所にとゝけて、その帳簿にかきしるす **契約證**（けいやくしょう） やくそくのしょーこ **金融**（きんゆう） かねの、くりまはし **値の高下**（ねだんのたか） **注意**（ちゅうい） こゝろをつける **勤儉**（きんけん） つとめ、けんやくする **旨とし**（むねとし） こゝろがける **貯蓄**（ちょちく） かねをた

め、る **怠るな**（おこたるな） ゆだんをするな **機敏**（きびん） はしこく、でばやい **三だから** 三つのたからともいふべきもの○信用、機敏、勤儉をいふ

第二十二課、法律

法律とは、のり、きまりなり、本課は、法律のなくてならぬこと、及び法律の如何なるものといふを書けり

事物（じぶつ） すべてのものごと **規則**（きそく） さまり **萬物**（ばんぶつ） すべてのもの **支配**（しはい） とりあつかふ **戻レ**（もとレ）

バ（ば） そむき、たがふ **病ヲ讓シ**（やまひをゆずし） やまひができる **死ヲ招ク**（しをまねく） しなねばならぬよーになる **安全**（あんぜん） ぶじにある **會社**（かいしゃ） よりあひて、しょーばいなどする所 **憲法**（けんぽう） 國の大本たるところの、のりおきて **含ム**（ふくむ）

その中にこもる **是非**（ぜひ） どうでも **權限**（けんげん） 自分にそなはる力のかぎり **義務**（ぎむ） つとめひき **規定**（きてい） さめ、さだめる **有シ**（ゆうし） もつてをる **シヒタゲラレ** ひごいあつかひをしられる **安寧**（あんねい） やすく、

おだやか 秩序 しだい 保チ難カルベシ たいせつに、もちこたへることが、できにくいであらう

第二十三課　人によりて法をまげず

本課は、人のたつときと、いやしきとによつて、國の法律をまげて、よきを、あしきとし、あしきを、よしとすることはせぬといふことを示したるなり

阿漕か浦 伊勢國安濃郡の海濱の名 **漁獵禁制** うををとることは、さしとめてある **犯す者** この禁制をきかずに、うををとりたるものは **罰つ** みいと嚴し よはゞ、きびしくある **紀伊侯** 徳川家康の第三子、徳川頼宣（ヨリノブ）の紀州に封ぜられたるもの **男** をとこの御子 **好まれ** すきである **幼けれ** ば 年が小さければ **迷惑** なんぎがる **侍童** おつきのこども **荒され** だいなしにされる **威に畏れ** いきはひにおそれ **訴へ** 役所へ申し出る **増長し** わがまゝが、ましつのる **出張**

○かたる騙

でばる **傲然** おごりがましさかたち **提灯の紋** 提灯は火をともすものなり、その提灯についたる、葵（あはい）の紋 **余は** われこそは **紀伊大納言** 大納言は、官名なり、紀伊侯頼宣を、かくいひしなり **憚る色** おそれかはいろ **驚き** びつくりする **馳せ歸り** はしつてかえる **長官** かしらやく **貴人** 身分のたかきひと **國法** くにのきまり **決して** どうしても **赦すべからず** ゆるすことはできぬ **よしく** よろしく **下役人** 手下の役人 **主從を捕へん** 徳太郎とその家來（ケライ）をめしとらうとした **例の如く** いつものよーに **無禮もの** しつれいなやつ **對して** むかつて **父君** おとつさん **汝等** そのほーたち **聲を荒らげ** 大きな聲をする **默れ** だまつてをれよ **心得ざる筈** 知つてをちぬといふわけ **かたるまことのものでない** **惡童** わるきこども **縛りあげ** なはにて

、くゝれよ 奉行所（役人のつめるところ） 翌日（あくる日） 不屈者（ふてぶてしなもの） 特別（べつだん）の 慈悲（なさけ） 遣はす（ゆるしてやる） 以後（これからのち） 慎むべし（きをつけねばならぬぞ） 縄を解き（しばったはなをほどく） 放ち（はなしやる） 剛毅（こゝろのつよき）こと 感ぜられ（かんしんしられる） 咎め（しかられること） 威（いきほひ） 法を重んぜし（國のきそくを、大切にしたる） 振舞（しょさ）

坪内雄藏著 國語讀本 高等小學校用 卷四字引終

明治卅四年七月廿五日印刷
明治卅四年八月一日發行

著者 的場鉎之助
發行者 大阪市東區備後町四丁目七十八番屋敷 吉岡平助
印刷者 大阪市南區東新瓦屋町二百廿六番邸 梶原謙吉

發賣所 大阪市東區備後町四丁目 吉岡書店
神戸市元町通五丁目 吉岡支店
京都市二條通河原町東入 寶文館

復製不許